

第四條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ普通刑  
 法第三十一條第二項第三項(位記貴號ヲ除ク)第四項第五項及ヒ第  
 四十三條ヲ除クノ外附加刑ヲ科セス  
 第五條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ輕罪ノ刑ニ處スル時監視ハ之  
 ヲ附加セス

第六條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者  
 ヲ以テ本刑トス(別表)

刑期	將校刑名	下士刑名	卒夫刑名
十年	流刑	同	同
三年	閉門半年後奪官	徒三年	同
二年	奪官	徒二年	同
一年	閉門半年後回籍	徒一年	同
百日	回籍	戒役	同
九十日	閉門半年後停官	錮三十五日後黜等	杖五十錮四十二日

八十日	七十日	六十日	五十日	四十日	三十日	二十日	一十日
閉門四十二日後停官 官 黜 等	降 官 錮三十日後降等一年半	降等一年	錮四十二日	錮三十五日	錮二十八日	謹慎三週日	謹慎二週日
杖四十錮三十五日	杖三十二錮十八日	笞三十二錮十八日	笞二十錮二十一日	笞十五錮十四日	同	同	同

○第二節 舊軍律ト普通刑  
 法トノ新舊比照  
 十五年四月第  
 二十號布告  
 舊軍律及ヒ普通刑法共ニ罪名アリテ所犯刑法施行前ニ係ル者ハ本年

(一月)第四號布告ノ例ニ準シ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス可  
但罰金科料ニ該ル者ハ明治十四年(十二月)第八十一號布告ニ依ル  
ヘシ

○第三節 罰金科料 十六年十一月第  
三十七號布告

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコ  
トヲ得

○第四節 海軍準士官犯罪 十六年一月海軍  
省丙第六號達

海軍準士官海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル時處斷ノ義別紙ノ通公達相成候  
條此旨相達候事

別紙 海軍省

海軍準士官海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル時ハ總テ將校ト同シテ處斷スヘ  
キ儀ト可相心得此旨相達候事  
明治十六年一月十九日

○第五節 陸軍上等卒犯罪 十五年八月司法省  
丁第四十一號達

今般太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

司法省

陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メニ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ  
都テ官吏ニ準シ候儀ト可相心得此旨相達候事  
明治十五年八月十五日

○第六節 憲兵卒犯罪 十五年十二月第  
七十三號布告

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス  
憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シ  
テ處斷ス

●第三章 犯罪

○第一節 軍人軍屬賭博 十七年四月丙  
第六十八號達

軍人軍屬賭博犯處分ノ義左ノ通被相達候ニ付右處分細則別紙ノ通相  
定候條此旨相達候事

海軍省

別紙

本年第一號布告賭博犯處分規則ニ依リ處分スヘキ者軍人軍屬ニ係ル時ハ憲兵部ノ處分ニ付シ該部ノ處分ニ付スルヲ得サル場合ニ在テハ陸海軍法衙ノ處分ニ付セシメ候條右規則施行ノ方法細則ハ其省ニ於テ便宜之ヲ定ムヘシ此旨相達候事

但軍人軍屬ニアラスシテ軍人軍屬ト共犯ニ係ル者ハ各其事件ヲ管理ス可キ官司ノ處分ニ付スル儀ト心得可シ

明治十七年三月廿四日

軍人軍屬賭博犯罪處分細則

第一條 軍人軍屬ノ賭博犯ハ憲兵部ノ處分ニ付スト雖モ該部ノ處分ニ付スルヲ得サル場合ニ在テハ軍法會議ニ於テ之ヲ處分シ又輕罪以上ノ罪ト俱發ニ係ル時モ軍法會議ニ於テ處分ス可シ

第二條 賭博犯ヲ以テ監獄ニ在ル者ハ海軍監獄ノ規則ニ照準シ其取扱ヲ爲ス可シ

第三條 懲罰ニ處セラレタル者ハ重禁錮ノ囚ニ準シ服役セシム可シ

第四條 過料ニ處セラレタル者ハ二十日內ニ之ヲ納完セシム若シ限內納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ懲罰ニ換フ其一圓ニ滿タ

サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス但納完期限ヲ待タズ懲罰ニ換フルヲ得

懲罰ニ換ヘタル者ト雖モ限內更ニ過料ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ懲罰ヲ免ス親屬其他ノ者代ヲ納メタル時亦同シ

第五條 懲罰ノ期限ハ宣告ノ日ヨリ起算シ放免ノ日ハ期限ニ算入セス其一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ但他罪ト俱發ニ係ル時ハ懲罰執行ノ日ヨリ起算ス

第六條 懲罰人悔悟悔改ノ狀アルトキハ監獄署長ヨリ獄守府監獄署長ハ其長官ヲ經由スヘシ其犯由及悔改ノ情狀等ヲ海軍卿ニ具申シ減免ヲ請フヲ得

○第二節

歸休兵及豫備後備軍ノ軍籍ニ在ル者犯罪 明治十九年五月陸軍省甲第十五號令

歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニ在ル者罪ヲ犯シ地方裁判所ノ處分ヲ受ケタルトキハ其罪名刑名ヲ記シ其帶勳者ニシテ勳章ヲ褫奪セラレタルトキハ其旨ヲ記シ犯人本籍地ノ戶長ヨリ郡區駐在官へ通報セシム可シ

○第三節

歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニ在ル者賭博犯ノ處分ヲ受タル時通報 十六年五月陸軍省甲第十八號

歸休兵及豫備後備ノ軍籍ニ在ル者賭博犯ノ處分ヲ受ケタルトキハ自  
今警察官ヨリ犯人本籍地ノ戸長ニ通報シ戸長ヨリ郡區駐在官ニ通報  
スヘシ

○第四節

陸海軍恩給ヲ受ケタル者賭博犯懲罰ニ處セラレタル件 官第四十九號達

陸海軍恩給命ニ依リ恩給ヲ受クル者賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處  
セラレタルトキハ同令第六條第一項ニ準シ扶助料ヲ受クル者同上ノ  
トキハ同令陸軍ハ第二十八條 海軍ハ第二十九條ニ準スヘキ儀ト可心得此旨相達候事  
但明治八年四月第四十八號達陸軍武官傷痕扶助死亡ノ者祭燻家族扶  
助概則及同年八月第四百四十八號達海軍退隱令ニ據リ扶助料若クハ退  
隱料ヲ受クル者モ本文ニ準スヘシ

○第五節 軍人夜中ノ乘馬

十五年四月第  
二十二號達

刑法第四百貳拾七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有  
之候處軍人制服ヲ着用乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相達候  
事

○第六節

舊海陸軍刑律  
ニ依リ奪官

十八年六月太政  
官第十二號達

舊海陸軍刑律ニ依リ奪官及ヒ回籍ノ刑ニ該リ文武大小ノ員ニ補スル  
ヲ禁セラレ又ハ武官大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレタル者宣告ノ日ヨ  
リ五年ヲ過クルノ後悛改ノ情狀ニ因リ其禁ヲ解クコトアルヘシ

# 第六編 治罪

## 第一類 [治罪法]

### ●第一章

#### ○第一節 治罪法

明治十三年七月  
第三十七號布告

#### 治罪法目錄

- 第一編 總則
- 第二編 刑事裁判所ノ構成及權限
- 第一章 通則
- 第二章 違警罪裁判所
- 第三章 輕罪裁判所
- 第四章 控訴裁判所
- 第五章 重罪裁判所
- 第六章 大審院
- 第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第一節 告訴及告發

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 証據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢証及ヒ物件差押

第六節 証人訊問

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第九節 保釋

第十節 豫審終結

第四章 豫審上訴

第四編 公判

第一章 通則

第二章 違警罪公判

第三章 輕罪公判

第四章 重罪公判

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第二章 再審ノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復権

第三章 特赦

第一編 總則

●前橋始審裁判所檢事伺  
 十六年九月三十日  
 脅迫姦淫ノ如キ被害者ノ告訴ヲ待テ論スヘキ罪其告訴ニ因リ檢事ノ請求シタル事件ハ假令豫審中被害者ノ棄權アルモ豫審判事ハ通常ノ規則ニ從ヒ仍終結ノ處分ヲ爲スヘキ筋ト相心得候得共

第一條 公訴ハ犯罪ヲ証明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ  
 第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス  
 第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス  
 第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スコトヲ許サ、ル場合ハ此限ニ在ラス  
 又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得  
 第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得  
 第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲スコトヲ得若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ  
 第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サ

意見反對ノ向モ有之ニ付此段相伺候也  
 但豫審判事ニ於テ未豫審ニ着手セサル内被害者ノ棄權アル場合ト雖正檢事ノ請求ニ係ル事件ハ本文同様處分スヘキ儀ト相心得可然ヤ添テ相伺候也  
 ○司法省指令  
 十六年九月廿九日  
 檢察官ノ起訴ヲ爲シタル後被害者棄權ヲ爲シタル時ハ豫審判事

レハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得ス  
 刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得  
 第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ官渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ  
 第九條 公訴ヲ爲スコトノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス  
 一 被告人ノ死去  
 二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和  
 三 確定裁判  
 四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止  
 五大赦  
 六 期滿免除  
 第十條 私訴ヲ爲スコトノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス  
 一 被害者ノ棄權又ハ私和  
 二 確定裁判  
 三 期滿免除  
 第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

ニ於テ本案ノ取  
調ヲ要セス直チ  
ニ免訴ノ言渡ヲ  
爲ス可キ者トス

●秋田始審裁判  
所檢事請訓  
明治十七年  
三月七日

詐欺取財事件ニ  
付甲裁判所ニ於  
テ公訴私訴ヲ併  
セテ裁判ヲナシ  
タル處被告ハ其  
裁判ニ不服シテ  
上告ヲナシタリ  
然ルニ大審院ニ  
於テハ法律ニ依  
リ理由ヲ付セサ  
リシハ不法ナリ  
ト其全部ヲ破毀

一違警罪ハ六月

二輕罪ハ三年

三重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判  
所ニ其訴ヲ爲シタル時雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス  
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ  
例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯  
罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨ  
リ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期  
限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付  
テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續  
ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第  
十五條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ  
第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ

シ更ニ乙裁判所  
ニ移サレタルル  
ヲ以テ乙裁判所  
ハ本按詐欺取財  
事件ニ付テハ公  
訴私訴併セテ適  
當ノ判決ヲナサ  
ルヘカヲササル  
ハ論ヲ俟タサル  
義ト被相考如何  
トナレハ原裁判  
ノ全部ヲ破毀セ  
ラルレハ即原裁  
判ノ無効ニ屬ス  
ルヲ以テ也然ル  
ニ反對ノ論者ア  
リ大審院ニ於テ  
原裁判ノ全部ヲ  
破毀シタルハ刑  
事ノ公訴ニ對ス  
ル裁判ノミニシ

屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ効ナカル可シ但裁  
判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラズ

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟  
ノ原由告訴人發行人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テ  
タル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムコトヲ得  
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人發行人又ハ民事原告人ヨ  
リ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル  
時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ  
被告人其止訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得  
要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲  
スコトヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又  
ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人  
ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場  
合ハ此限ニ在ラズ

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨ



テ私訴ニ及サル  
モノナレハ乙裁  
判所ハ刑事ノ公  
訴ニ對スル判決  
ヲ爲スニ止マリ  
私訴ノ裁判ヲ與  
フルノ限リニア  
ラサル旨主張ス  
ト雖刑事ニ附  
帶シテ刑事裁判  
所ニ私訴ヲナシ  
タル場合ハ即本  
按裁判ノ無効ニ  
屬セハ隨テ從テ  
ル附帶ノ私訴モ  
効力ヲ失フルハ  
當然ナルヲ以テ  
ノ裁判所ハ大審  
院ノ破毀ニ係ル  
公訴私訴ヲ併セ  
判決ヲナスハ至

リ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當  
ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス  
一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ  
一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加  
フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタ  
ル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假  
住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖  
モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ  
規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所属ノ使丁ヲシテ之  
ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ  
裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

當ト存候得共爲  
念御内訓ヲ仰候  
也

但シ被告等カ  
上告ノ當時ハ  
殊更私訴ノ裁  
判ニ對シ何等  
申立サル義ニ  
付御參考迄申  
添候也

○司法省内訓  
十七年三月  
廿四日  
請訓ノ趣ハ乙裁  
判所ニ於テ更ニ  
私訴ノ裁判ヲ爲  
スニ及ハス此旨  
及内訓候也

●神戸始審裁判  
所檢事請訓  
明治十六年

第六編○治罪○第一類○治罪法

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡  
スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ  
送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署  
名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受  
取ルコトヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ  
速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載  
ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ  
之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラ  
ズ此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其  
送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及  
ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用

十一月六日

第一條 期滿免  
除ノ期限ハ犯  
罪ノ日ヨリ計  
算スト雖モ新  
法實施以前ノ  
犯罪ニ付テハ  
明治十四年十  
二月卅一日迄  
ハ其期限ヲ中  
斷シタルト同  
一ノモノトス  
但前後通算ノ  
法ハ治罪法第  
十四條第二項  
但書ノ通りタ  
ルヘシ云々先  
般上田始審裁  
判所ノ伺ニ對  
シ御指令相成  
且一般ヘモ御

フコ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル  
時ハ其書類ノ效ナカル可シ  
官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ  
署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除  
クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ  
第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄  
本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記  
入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ  
字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ  
效ナカル可シ  
第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒  
布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス  
頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背キタル時ハ其效アリ  
トス  
第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公  
判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ又之ヲ適用ス但其法律ニ牴觸スル規  
則ハ此限ニ在ラス

達相成候處右  
御指令ノ趣意  
ハ例ヘハ明治  
十四年十二月  
卅一日迄ニ既  
ニ滿六年ヲ經  
過シタルモノ  
ト雖モ新法御  
實施ノ日ヨリ  
滿三ヶ年間ハ  
之ヲ罰スルコ  
ト得ルノ儀ニ  
可有之哉又ハ  
其犯罪ノ日ヨ  
リ新法御實施  
ノ日迄既ニ滿  
六年ノ期限ヲ  
經盡シタルモ  
ノハ公訴ヲ免  
カレ候儀ニ可  
有之哉

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル  
犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス  
第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適  
用スルコトヲ得ス  
第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條  
ノ例ニ從フ  
第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限  
第一章 通則  
第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬  
ス  
第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上  
裁ヲ以テ之ヲ定ム  
第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク  
第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ  
一 犯罪ヲ捜査ス  
二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス  
三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

第二條 新法御

實施前ノ犯罪  
公訴期滿免除  
ノ期限起算方  
ノ儀前條初項  
ノ解釋ノ如キ  
ニ候ハ、被害  
者ノ不利稍々  
薄シト雖モ若  
シ後項ノ如キ  
ニ候ハ、被害  
者ニ於テ俄然  
一大不幸ヲ被  
ルノ恐レ不少  
ト考量致シ候  
何トナレハ舊  
法施行ノ際ニ  
在テハ假令數  
年ヲ經過シ舊  
惡滅免ニ依リ  
罰ヲ免カル、

四裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會ヲ可シ  
第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク  
第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟  
ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ  
又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ  
第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルコト左ノ如シ  
一 違警罪ハ違警罪裁判所  
二 輕罪ハ輕罪裁判所  
三 重罪ハ重罪裁判所  
重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對  
シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之  
ヲ管轄ス  
第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス  
一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時  
二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時  
三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ

モソト雖モ被

害者其犯罪ソ  
爲メ損害ヲ受  
ケタル事實ヲ  
告訴シ其証充  
分ニシテ且贓  
品賊手ニアル  
ルハ法官追徵  
シテ被害者ニ  
還付スルノ成  
例ニ有之候處  
新法御實施公  
訴私訴期滿免  
除ノ制ヲ被設  
候ガ爲メ舊法  
ノ際犯罪ニ因  
テ害ヲ被リタ  
ル者其物件假  
令賊手ニアル  
顯然タルモ犯  
罪ヲ原由トシ

他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ  
公判ノ管轄ナリトス  
犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄  
ナリトス  
第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一  
箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其  
管轄ナリトス  
數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ  
第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮  
捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ  
令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送  
致ス可シ  
第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スル  
コト能ハス若クハ法律上逮捕スルコトヲ許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫  
審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第六編 治罪 第一類 治罪法

テ之ヲ告訴スルヲ得ス何トナレハ治罪法第十二條ニ依レハ公訴私訴共ニ期滿免除ノ期ヲ同シフスレハナリ抑モ贓物返還ノ訴ノ如キハ刑事ニ附帶スルモ素民法ノ原則ニ從ヒ支配スヘキモノナレハ假令新法舊法ヨリ輕キヲ以テ舊犯罪ニ公訴期滿免除ヲ適用スルヲ得ルモ贓物返還ノ訴ニマ

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ若手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス  
 第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス  
 關席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ  
 第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テハ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム  
 第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ關席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

明治十  
 四年十  
 二月十  
 九日司  
 法省達  
 丁三十  
 四號ヲ  
 以テ消  
 決件數表  
 第六十二號

テ新法ヲ適用スルハ法理上不可ナルノミナラズ實際上大ニ被害者ノ不幸尠カラズト存候依テ新法御實施前ニ在テ犯罪ノ爲メ害ヲ受ケタル者ハ其贓品現存スルハハ賊手ニ在ルト否トヲ問ハス(例ヘハ詐欺ノ手段ニ係リ奪取サレタル地所家作船舶ノ類)其證判然タルモノハ公訴ノ期滿免除

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヲ得  
 第二章 違警罪裁判所  
 第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス  
 第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ  
 第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ  
 第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ  
 事件表ニ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
 第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ  
 第三章 輕罪裁判所  
 第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シ

第六編〇治罪〇第一類〇治罪法

違犯罪刑問  
表ハ廢止ト  
ス

ニ拘ラス  
追徴ノ處分總  
テ舊法ノ手續  
ニテ取扱候様  
致シ度ト思考  
仕候

第三條 若シ前  
條ニ陳述セル  
如ク私訴期滿  
免除ニ付テハ  
新法御實施以  
前ノ被害事件  
ニ遡ラサル儀  
ニ有之候得ハ  
舊法賍物追徴  
處分ノ如ク刑  
事裁判所ニ於  
テ取扱候方頗  
ル便益ト被考  
候得共果シテ  
刑事裁判所ニ

タル輕罪ヲ裁判ス  
又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ  
又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス  
第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事  
一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス  
又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得  
第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ  
數名ニ滿一年間之ヲ命ス  
又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得  
第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ  
判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得  
第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名  
シタル檢事補之ヲ行フ  
第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ  
第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法  
警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京  
府長官ハ此限ニ在ラス

於テ處分シ可  
然哉

○司法省内訓  
十六年十一  
月十七日

請訓ノ趣左ノ通  
心得ヘシ  
第一條 後段見  
解ノ通但舊惡  
減免例圖ニ照  
ラシ減免ニ係  
ル者ハ期滿免  
除ノ期限ヲ經  
過セスト雖モ  
仍ホ舊法ニ依  
リ減免ス

第二條 第三條  
舊法ノ舊惡減  
免ニ該ルヘキ  
場合ハ治罪法  
第三百六條ノ

第六編○治罪○第一類○治罪法

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定  
メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官

又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實參  
考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコト可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作  
リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差  
出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ  
對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

旨意ニ依リ私  
訴ノ裁判モ併  
テ刑事裁判所  
ニ於テ之ヲ爲  
スコトヲ得ルモ  
若シ新法ノ期  
滿免除ニ該ル  
ヘキ場合ニシ  
テ木案ノ辨論  
終結前ニ在テ  
免訴スヘキ時  
ハ刑事裁判所  
ニ於テ其私訴  
ニ付テノ裁判  
ヲ爲ス可ラサ  
ルニ付民事原  
告人ハ更ニ民  
事裁判所ニ出  
訴セサル可カ  
ラス

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ  
順次滿一年間之ヲ命ス  
又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得  
第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシ  
テ其職務ヲ行ハシム  
裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルコトヲ得  
第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢察長又ハ其指名シタ  
ル檢事之ヲ行フ  
第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ  
屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之  
ヲ行ハシムルコトヲ得  
又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトア  
ル可シ  
檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス  
第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ  
作り司法卿ニ差出ス可シ  
又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ

福岡縣伺

明治十六年  
九月廿七日

官吏職務ヲ行フ  
ニ當リ重罪輕罪  
アルコトヲ認知又  
ハ思慮シタルハ  
相當ノ官吏ニ告  
發スヘキハ治罪  
法第九十六條ニ  
於テ命令アル儀  
ニ有之候然ルニ  
告發後若シ其被  
害人罪トナラサ  
ル場合其損害ノ  
償ヲ要ムルモ法  
律ノ命令ニヨリ  
職務ヲ以テ爲シ  
タルモノナレハ  
其要償ノ義務ヲ  
有セス同法第十  
七條ニ準據スヘ

且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ  
第五章 重罪裁判所  
第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス  
第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク  
若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申  
シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルコトヲ得  
第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開  
ク  
第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ  
一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス  
二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判  
所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及  
ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ヲ充ツ  
第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指  
名シタル檢事之ヲ行フ

第六編〇治罪〇第一類〇治罪法

キモノト被存候  
 得共同條ニハ檢  
 察官又ハ司法警  
 察官ト指定シ一  
 般官吏ニ適用ス  
 ルノ明文ト難認  
 候條爲念一應相  
 伺候也  
 ○司法省指令  
 十六年十月  
 九日  
 伺ノ趣治罪法第  
 十七條ニ掲載シ  
 タル官吏ト均ク  
 要償ノ訴ヲ受ケ  
 サル儀ト心得ヘ  
 ン

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職  
 務ヲ行ハシムルコトヲ得  
 第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ  
 行フ  
 第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿  
 ニ差出ス可シ  
 事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
 第六章 大審院  
 第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス  
 一 上告  
 二 再審ノ訴  
 三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴  
 四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴  
 第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可  
 カラス  
 第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之  
 ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ  
 第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事  
 之ヲ行フ  
 第八十一條 檢事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ  
 第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ  
 作り司法卿ニ差出ス可シ  
 事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
 第七章 高等法院  
 第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタ  
 ル重罪ヲ裁判ス  
 又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス  
 又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス  
 第二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院  
 ニ於テ之ヲ裁判ス  
 第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其  
 裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム  
 第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サズ但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルコトヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルコトアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ニ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ



又告訴人ハ第一百條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルコヲ得  
第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書  
ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞セ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺  
印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ  
告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ  
重罪輕罪アリト思料セタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發  
ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及  
ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ  
違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ア  
リト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ  
地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ  
得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ  
第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第九十六  
條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス  
第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得  
此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クル  
コトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタ  
ル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレ、時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時

三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可  
キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行  
犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕

ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第三百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ  
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第三百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第三百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第三百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告發又ハ告發ヲ爲ス可シ  
被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求

ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第七七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕罪難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト

思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時

ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第三百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處

分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第三百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物

第六編〇治罪〇第一類〇治罪法

ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第一百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得

第一百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スコトヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第一百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ隨ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第一百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第一百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且憑證及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ  
第一百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ

檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從  
ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲  
ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ  
若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思量シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被  
告人ヲ送致スルコトヲ得

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類  
ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ  
又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪  
ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召  
喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ廿四時ノ猶豫アル可シ  
召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クト  
モ出廷ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セ  
サル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ  
其處分ヲ囑託スルコトヲ得

●京都始審裁判  
所檢事請訓  
明治十六年  
十一月廿六  
日  
第一條 司法警  
察官ニ於テ現  
行準現行犯罪  
人ヲ訊問スル

ニ其共犯者他  
ノ犯罪ニ依リ  
現ニ既決監ニ  
在リ訊問ヲ要  
スル場合ニ於  
テハ別ニ令狀  
ヲ要セス司法  
警察官ヨリ該  
囚護送方ヲ監  
獄署ヘ照會シ  
監獄署ニ於テ  
ハ右照會書ニ  
依リ護送ス可  
キ者ニ有之候  
哉將タ勾引狀  
ヲ發シ引致セ  
シメ訊問ス可  
キ儀ニ可有之  
哉  
第二條 司法警  
察官ニ於テ事

第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セザ  
ル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコ  
トヲ得  
一被告人定リタル住所アラサル時  
二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時  
三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐  
アル時  
第百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其命令ヲ發シタル豫  
審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ  
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若  
シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放  
ス可シ  
第百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外  
ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ  
得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發  
シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

實參考ノ爲メ  
 既決囚ノ陳述  
 ヲ聞カントス  
 ル時ハ該囚謹  
 送方監獄署ヘ  
 照會ス可キ者  
 ニ有之候哉將  
 マ報知書ヲ監  
 獄署ヘ送致シ  
 監獄署ニ於テ  
 ハ其報知書ヲ  
 本人ヘ下付シ  
 タル上無論護  
 送ス可キモノ  
 ニ可有之哉  
 右仰内訓候也  
 ○司法省内訓  
 十六年十二  
 月五日  
 第一條 後段見  
 解之通

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告  
 人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ  
 又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キコトヲ請求ス可  
 シ  
 其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀  
 ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前  
 ニ發シタル拘引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス  
 可シ  
 第二百五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病  
 其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ  
 被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人其管轄地外ニ  
 在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ  
 第二百二十六條 勾引狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合ヲ除  
 クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料ス  
 ルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス  
 第二百二十七條 豫審判事ハ勾引狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時  
 ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責

第二條 前段見  
 解通之

付ス可シ  
 檢事ハ被告人ヲ責付スルコト更ニ十日間之ヲ拘留ス可キコトヲ豫  
 審判事ニ求ムルヲ得  
 第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ  
 且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス  
 第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ  
 一 被告事件ノ概要及ヒ加重減輕ノ模様ナル時ハ其概略  
 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條  
 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト  
 第三百十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記  
 載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等  
 ヲ明示ス可シ  
 又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名  
 捺印ス可シ  
 拘引狀拘留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム  
 第三百十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁  
 ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

●京都府請訓

明治十六年  
八月三十日

第一條 治罪法

第三百三十三條  
ニ家宅ニ潛匿  
シタリト思料  
シタルハ云  
々トアリ現ニ  
見認ル時ト雖  
トモ客年第四  
十六號公布第  
五項ヲ除クノ  
外日出前日没  
後ハ家宅搜索  
致難筋ニ有之

第三百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但

時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可

シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ

他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支ア

ル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會

人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得

第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知

リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル

時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示

シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時

ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜索及ヒ逮捕ヲ

候哉

第二條 全第百

八十一條第百

八十貳條ニ左

ニ記載シタル

モノハ證人ト

爲ルコトヲ許サ

スト有之立會

人トナルコトヲ

得サルノ明文

無之ニ付無能

力者ヲ除クノ

外立會人トナ

ルコトヲ得ル儀

ト心得可然哉

右及請訓候也

○司法省内訓

十六年九月

十一日

請訓ノ趣第一條

令狀執行人ニ於

爲ス可キコトヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜索及ヒ逮捕ノ

處分ヲ爲サシム可シ

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所

屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレ

ハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ

記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時

ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閱シテ被告人ヲ受取り其證

書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルコト又

執行スルコト能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書

ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ

獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ

テ現ニ目撃シタル場合若クハ戸主ノ承諾アルハ何時ニ拘ハラズ家宅搜索ヲ爲スコトヲ得第二條ハ見解ノ通此旨及内訓候也

記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルコトヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ拘留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類

貨幣其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ自狀官吏ノ檢證調證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトシテ證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト

共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人  
二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏  
一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀開カセ立會人  
ト共ニ署名捺印ス可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ

證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇  
又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀開カス  
可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム  
可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印

ス可シ

第五百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ申立タル時  
ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ  
讀開カセ署名捺印ス可シ

第五百十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第五百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實  
ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人  
ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第五百十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事  
件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀開カス可シ

第五百十一條 第五百十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
第五百十六條 被告人又ハ對質人聲ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル  
時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聲者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ  
命スヘシ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ  
書記ハ通事ニ調書ヲ讀開カセ之ニ署名捺印セシム可シ



第九十二條第九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ摸樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載ス可シ

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルコトヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十三條 被告人ハ臨檢家宅拘索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ會立ハシムルコトヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フコトヲ得但豫審判事其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラズ  
允許ヲ得シテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得  
若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留  
置スルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜  
索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞  
電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係ア  
ル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ  
受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ  
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ  
指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ  
事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件

ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要  
ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被告ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之  
ヲ呼出ス可シ

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出  
狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達  
ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住  
所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事  
ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判  
所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ又  
出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且拘引スル  
コアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ  
 第一百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ  
 第一百七十五條 證人ト爲ス可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上己ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ  
 第一百七十六條 豫審判事ハ前三條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス  
 豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム  
 若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且拘引狀ヲ發スルコトアル可シ  
 第一百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第一百七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ

事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ  
 第一百七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ  
 第一百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ  
 第一百八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ  
 豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ  
 宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ  
 第一百八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得  
 一 民事原告人  
 二 民事原告人及ヒ被告ノ親屬  
 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者  
 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未満ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘡啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑

ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラサ

ルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓セテ陳述ヲ肯セサル時ハ

豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可

シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身

分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ

在テス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ

但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人

ト對質セシムルコトヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナ

リトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰

金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦

之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其

所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニ証人宣誓ヲ爲シタルコト又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシム

ル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリ

タルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共

ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附

記ス可シ

第九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得  
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シ  
キ償金ヲ要ムルコトヲ得

第七節 鑑定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシム  
ル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ  
得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ  
其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル  
時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
但拘引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓  
ハ第九十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣

誓書ヲ添置ク可シ

第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時  
ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡  
ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十二條第九十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定  
ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ  
事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定  
人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタ  
ル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一  
箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印  
ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ  
檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ  
作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リ  
タル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チ  
ニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從  
ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢  
證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重  
罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ  
繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終

結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知り  
タル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審  
判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス  
証人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトヲ得ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添へ速ニ  
之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ  
亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ証憑書類ニ意見書ヲ添へ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事  
ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ  
調書ヲ作り拘留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ  
添へ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免  
ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ

於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得  
第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ  
更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ  
之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀ヲ發シタ  
ルト否トニ拘ハラズ被告入ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハス  
ト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人  
ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キ  
ノ証書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

第二百十一條 前條ノ証書ハ書記局ニ差出ス可シ  
保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可  
シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保証セシ  
ム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保証ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若ク  
ハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ  
可キ保証書ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セ  
サル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條 保証金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其  
言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保証ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ  
第二百十六條 豫審判事保証金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消  
ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見  
ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁  
判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移  
スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ  
還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又故舊ニ責付スルコトヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハズ後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發

シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ  
第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ憑證充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シ



●大坂控訴裁判所  
明治十七年三月十日

重罪被告事件ニ付豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ治罪法第二百二十七條ニ從ヒ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ

タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ  
禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲ス可キヲ得  
若シ被告人未タ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得  
第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ  
重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコトヲ記載ス可シ  
第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ  
管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

留置シ檢事ニ於テハ右言渡確定シタル時ハ治罪法第二百六十條ニ從ヒ其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ニ於テハ重罪裁判所開廳ノ期ニ至リ治罪法第六十條第二項ニ從ヒ被告人ヲ某重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スルノ手續ニ有之處玆ニ豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣証憑ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ  
第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ  
第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ拘留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス  
第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得  
第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ  
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

確定ノ上檢事ヨリ書類ヲ檢事長ニ送致シ未ダ重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラズシテ被告人ハ仍ホ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ留置中其親屬等被告人ト面接願ヲ申請シタル者アラシニ治罪法第三百八十二條第三項ニ依ルニ辯護人ヲ除クノ外何人ト雖重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得  
 一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時  
 二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時  
 三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時  
 四 越權ノ處分アル時  
 民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得  
 第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ  
 故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得  
 故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス  
 第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

被告人現ニ拘留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラズト有之就テハ右但書ニ被告人現ニ拘留ヲ受クル地ノ裁判所長トアルハ譬へハ前顯ノ如ク豫審ノ言渡確定スルモ未ダ管轄重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラズ單ニ書類ノミ檢事長ニ送致シ被告人ハ猶ホ原裁判所管内ノ監倉ニ留置ノ場合ニ在テハ原裁判所即チ豫審ヲ爲シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得  
 第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得  
 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時  
 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時  
 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時  
 第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ  
 第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得  
 會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ

タル輕罪裁判所  
長ノ允許ヲ受ク  
ル儀ナルヤ果シ  
テ然ラハ該裁判  
所長ニ在テハ固  
ヨリ其管掌ニ屬  
セサル事件而已  
ナラス其被告事  
件ノ何タルヤ未  
ダ曾テ與カリ知  
ラスシテ且ツ書  
類モ既ニ檢事長  
ニ送致シアル者  
ナレハ該裁判所  
長ニ於テハ之ヲ  
許否スルニ由ナ  
キ者ト愚考セリ  
又未ダ重罪裁判  
所開廳ノ期ニ至  
ラサルモ檢事長  
ノ指揮ニ依リ豫

為ス可シ  
第二百四十四條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却  
シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終  
結ノ言渡ヲ爲スコヲ得ス  
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコヲ得  
第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ  
上告ヲ爲スコヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲  
スコヲ得ス  
第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アル  
コヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立  
ヲ爲ス可シ  
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時  
ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事  
其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタ  
ル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコヲ得  
第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會

テ被告人ヲ其ノ  
開廳ス可キ重罪  
裁判所ノ下トニ  
在ル監倉ニ移シ  
留置シ猶ホ未ダ  
重罪裁判所開廳  
セサル場合ハ何  
レノ裁判所長ニ  
於テ之レカ允許  
ヲ得ル儀ニ有之  
哉若クハ猶ホ原  
裁判所即チ輕罪  
裁判所長ノ允許  
ヲ受ルノ手續ナ  
ル哉  
○司法省指令  
十七年三月  
廿五日  
伺ノ趣被告人豫  
審ヲ受ケタル裁  
判所附ノ監倉ニ

議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコヲ得  
第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スル  
コヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ  
申立ツルコヲ得  
檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可  
シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ  
第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコヲ  
得  
民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ  
對シ故障ヲ爲スコヲ得  
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコヲ得輕罪裁  
判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違  
越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲナス  
コヲ得ス  
第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタ  
ルヨリ之ヲ起算ス  
第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書

在ル時ハ其裁判所長ノ允許ヲ受ケ已ニ開廳スヘキ重罪裁判所附ノ監倉ニ移シタル時ハ其開廳スヘキ始審又ハ控訴裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ト心得可シ

●大阪控訴裁判所檢事請訓

明治十六年十二月十日  
凡ソ公訴ノ豫審タルヤ毎常極ノテ難讞疑獄ニ係リ務メテ鄭重慎重ヲ旨トシ要スルニ被告事件ノ

ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ  
故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコトヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ  
對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ拘留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セズ

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

証據徵憑ヲ集取シ以テ充分ノ証

憑アルヤ否ヲ判決スルノ一點ニ外ナラズ然リ而シテ其集取シタル數箇ノ証憑中必スヤ信否取捨一ナラスシテ之レカ判決ヲ與フルヤ精確ニ心証ノ資料ヲ擇ラヒ事實ノ眞據ヲ明カニシ判決ノ理由ヲ示シ以テ裁判ノ公平無偏ヲ保チ須ラク証憑曖昧ノ間ニ事實ヲ誤リ無辜ノ民ヲシテ不幸ノ害ニ陥ラシメサル

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ拘留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スコトヲ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ  
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ

ヲ要ス可キモノ  
タルヤ言ヲ俟タ  
ス然ルニ當廳所  
轄ノ各裁判所ニ  
於テ間ニハ豫審  
ノ言渡書中証憑  
ノ事項ヲ明示セ  
ス單ニ証憑充分  
トノニ零記スル  
者有之是等ハ何  
ノ証憑ニ依テ充  
分ナリト判定シ  
タルヤ漠然トシ  
テ其必信ノ証據  
更ニ知了スルニ  
由ナク乃チ檢察  
官ニ於テハ犯罪  
ヲ証明スルノ資  
料ヲ擇フニ煩ハ  
シク被告人ニ於  
テハ自護ノ反証

爲ス可キ得  
第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴  
スルヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ記載スヘシ其記載ナキ時ハ規則ニ從  
ヒ更ニ言渡書ノ送達アルヲ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナカル可シ  
第二百五十九條 第三百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審  
ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡  
書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ  
檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處  
分ヲ檢事ニ命ス可シ  
重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其  
執行ヲ爲ス可シ  
第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シ  
タル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナ  
カル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス  
新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ  
其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

ヲ照考スルノ便  
ヲ缺キ被告人ノ  
幸不幸ヲ來タズ  
而已ナラズ公衆  
ノ危險モ亦尠ナ  
シトセス旁々不  
都合ヲ生スルヲ  
覺フ抑モ治罪法  
第二百二十八條  
末項ニ違警罪裁  
判所輕罪裁判所  
又ハ重罪裁判所  
ニ移スノ言渡ヲ  
爲スニハ犯罪ノ  
性質摸樣証憑ノ  
充分ナルヲ及ヒ  
其罪ヲ罰ス可キ  
法律ノ正條ヲ明  
示ス可シト有之  
夫レ本條ノ精神  
タルヤ証憑ノ充

第四編 公判  
第一章 通則  
第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ  
之ヲ公判ニ付ス可シ  
裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變  
更スルコトヲ得  
又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ  
亦順序ヲ變更スルコトヲ得  
第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公  
行ス否ヲサハル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ  
第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スル  
ノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其  
訊問及ヒ辨論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍  
聽ヲ許ス可シ  
第二百六十五條 被告人ハ公庭ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但  
守卒ヲ置クコトアル可シ  
禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサ

分ナルコトヲ明示  
 スル最モ緊要點  
 ニソ所謂証憑充  
 分ナルコトヲ明示  
 ストハ決メ証憑  
 充分トノミ單前  
 スルノ謂ニ非ラ  
 スシテ必ス証憑  
 ノ事項ヲ明確ニ  
 臚列明示スルノ  
 謂ニ外ナラサル  
 可シ玆ニ當廳ノ  
 所轄中ニ於テ過  
 半ハ本議同感ノ  
 モノ有之ト雖二  
 三ノ裁判所ニ在  
 テ前顯ノ如キ証  
 憑畧記ノ判文ヲ  
 用ヒ反テ簡便ニ  
 シテ適法ナリト  
 主張スルモ有之

ル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辨論スルコトヲ肯セサル時  
 ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
 第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用フルコトヲ得  
 辨護人ハ裁判所々屬ノ代官中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允  
 許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲スコトヲ得  
 第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辨論ヲ妨礙  
 スル時ハ裁判長ヨリ再度吾戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官  
 ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スル  
 コトヲ得  
 前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコ  
 トヲ得  
 若シ辨論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ  
 第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサ  
 ル時ハ痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス  
 辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨  
 論ヲ爲スコシ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ  
 以後ノ手續ヲ爲スコシ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟

是レ必竟法律ノ  
 見解ヲ異ニシ且  
 手續ノ鄭重簡易  
 ノ兩主義互ニ相  
 背馳スルニ之レ  
 職由セン固ヨリ  
 當廳ニ於テハ一  
 同本議ニ異論無  
 之ト雖モ他ノ各  
 裁判所ニ在テハ  
 議論異同有之抑  
 亦豫審判事ノ判  
 決ニ於テ証憑ノ  
 取捨信否ノ異同  
 之レ有ルハ格別  
 ナルモ判決ノ言  
 渡書ニ其心証ノ  
 資料即チ豫審ノ  
 必要タル証憑ノ  
 事項ヲ明示スル  
 ト否ラサルトノ

關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲スコシ  
 若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタル時ハ其痊  
 癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判言渡ヲ爲スコシ  
 第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷  
 セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證  
 アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲スコカラス  
 豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ  
 於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル  
 時ハ闕席裁判ヲ爲スコキノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ送達ス可シ  
 第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルコトヲ許サ  
 ス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スル  
 コトヲ得  
 裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁  
 判ヲ延期スルコトヲ得  
 第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタ  
 ル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲スコシ  
 第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置

異同有之一定ノ制規無之ハ頗ル不都合ト謂ハサルヲ得ス倘シ或ハ謂ハンは等ノ異同有ルモ法律上敢テ妨ケナシトシ猶ホ各自ノ意見ニ放任シ去ラハ恐クハ豫審ノ處分自然荒疎ニ傾キ泛濫ニ流レ如何ナル弊害ヲ生センモ難測就テハ假令法律上明文アルニ非ラスト謂フモ前顯通治罪法第二百廿八條末項ノ精神ニ釋スルニ必ス証憑ノ事項

ヲ爲ス可シ  
稱讚誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヲ得  
第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ  
第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ  
第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辨論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪

ヲ明示スルヲ以テ元則トセン最モ實際ノ利害ニ試ミ以テ本議ヲ是認セサルヲ得ス就テハ前陳ノ如ク議論兩岐ニ涉リ終結一定致サ、ル義ニ付御内訓ヲ仰ギ候條何分御垂示被成下度此段稟請候也  
○司法省内訓  
十六年十二月廿八日  
請訓ノ趣豫審ノ言渡書ト公判ノ言渡書トハ自然其趣ヲ異ニスル者ニ付治罪法第

ニ付テハ此限ニ在ラス  
若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得  
第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得  
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得  
第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス  
第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得  
豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ  
第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ

第六編○治罪○第一類○治罪法

二百二十八條末  
 項ニ定メタル言  
 渡書ハ犯罪ノ性  
 質摸樣ノ如キハ  
 成ル可ク明白ニ  
 記載スルヲ要ス  
 可シト雖モ証憑  
 ニ至テハ一々明  
 示スルニ及ハス  
 其証憑ノ充分ナ  
 ルヲ記載スル  
 ヲ以テ足レリト  
 ス此旨及内訓候  
 也

●長野縣請訓

明治十六年

十二月四日

被告事件ニ付拘  
 留狀ヲ以拘留中  
 ノ者十日ヲ經過  
 スルモ豫審判事

之ヲ爲スコト得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百

三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シ

タルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時ハ

新ニ辨論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ証

據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ

職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢証書類ヲ朗讀セ

シムルコト得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係

人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出ス

コト得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其  
 裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコト得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スコト

得

豫審ニ於テ錄取シタル証人ノ陳述書ハ更ニ其証人ヲ呼出サ、ル時

証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比

較スヘキ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職

權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコト得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ証人ニモ亦之ヲ

適用ス

第二百八十八條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又陳述前辨論ニ立

會フ可カラヌ

第二百八十九條 証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

第二百九十條 証人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス

ニ於テ收監狀ヲ  
 不發又責付ヲモ  
 不許依然打捨置  
 候場合ニ於テハ  
 司獄官吏ニ於テ  
 被告人ヲ釋放ス  
 可キヤ將テ發ス  
 可キ令狀ヲ發セ  
 サル時治罪法第  
 二百三十四條ノ  
 規則ニ依リ被告  
 人ニ於テ故障ヲ  
 爲スコト得ルニ  
 止リ假令拘留狀  
 期限ヨリ幾日經  
 過スルモ依然拘  
 束致置クヘキモ  
 ノナルヤ疑義ヲ  
 生シ候ニ付至急  
 何分ノ御明示相  
 成度此段及請訓



候也

○司法省内訓

十六年十二月廿日

別紙請訓ノ趣豫  
審判事ニ於テ收  
監狀ヲ發セヌ又  
責付ヲ爲サ、ル  
時ハ司獄官吏ヨ  
リ檢事又ハ豫審  
判事ニ期限經過  
ノ旨ヲ通知ス可  
此旨及内訓候也

●岡山始審裁判  
所檢事請訓

明治十七年  
四月十日

第一條 甲裁判  
所ノ重罪公判ニ  
對シ上告ヲナ

可シ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更ス  
ルコヲ得

第二百九十一條 証人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スル  
コヲ得ス  
陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ヒ被告人ヲ訊問スル  
ヲ得

第二百九十二條 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ  
該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人  
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ以テ豫審判事ニ  
送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ  
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因  
リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ヲ延期ヲ言渡スコヲ得

第二百九十三條 証人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察  
官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故

障及ヒ控訴ヲ許サス

一違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル証人出廷セスト雖モ科料罰金  
ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ  
其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルコト能ハサリシ正當ノ事由ヲ  
證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ  
言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ  
其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ  
請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲ス  
コヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス  
可シ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官  
ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用

シ大審院ニ於  
テ之ヲ破毀シ  
乙裁判所ニ移  
サレタル時ノ  
場合被告事件  
一切ノ書類ヲ  
送致スヘキ手  
續別段ノ正條  
ナキテ以テ或  
ハ甲裁判所ヨ  
リ直チニ其移  
アレタル乙裁  
判所ノ管轄檢  
事長ヘ送致ス  
ルモアリ或ハ  
乙裁判所ノ檢  
事ヘ被告人ト  
共ニ送致シ乙  
裁判所ノ檢事  
ニ於テ更ニ治  
罪法第二百六

十條ノ例ニ原  
キ其控訴裁判  
所檢察長へ送  
致スルモアリ  
其取扱區々ニ  
有之輕罪ニ於  
テハ原裁判所  
ヨリ直チニ其  
移サレタル裁  
判所へ送致ス  
ルヲ以テ例ト  
ナスモ重罪事  
件ニ於テハ必  
檢察長ヲ經サ  
ルヘカラサル  
モノニ付何レ  
ノ手續ニ從フ  
ヘキヤ前説ノ  
如キハ其管轄  
ニアラサル裁  
判所ヨリ他ノ

ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコ  
ヲ得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ拘引狀ヲ發ス可シ  
第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタ  
ル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條  
ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証  
人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
第二百九十八條 被告人讞者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第  
百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ  
第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官  
其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ  
裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ  
變更スルコヲ得  
第三百條 証憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人及ヒ民事  
擔當人ハ順次發言ス可シ  
檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコヲ得ス  
檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スコヲ得但辨論ノ最終ニ

管轄ノ檢察長  
へ送致スルハ  
或ハ事ノ順序  
ヲ逐ハサルモ  
ノ、如シ然ラ  
ハ後説ノ手續  
ニ從フヲ以テ  
穩當トナス手  
第二條 輕罪事  
件上告中被告  
人ヲ保釋又ハ  
責付シタル場  
合破毀ノ上他  
ノ裁判所ニ移  
サレタル時ハ  
其責付保釋ハ  
當然取消ヘタ  
ルモノトシ更  
ニ拘留ノ一件  
書類ト共ニ送  
致スヘキモノ

ハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發言セシム可シ  
第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ  
相當ノ裁判ヲ爲ス可シ  
第三百二條 辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判  
所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對  
スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲  
コヲ得ス  
第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ何時ニテモ其訴訟ニ關  
係スルコヲ得  
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコヲ得  
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判  
決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲ス  
コヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス  
第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ  
其理由ノ明示シ且一切ノ証憑ヲ明示ス可シ  
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ  
第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪

ナル哉

右仰御内訓候也

○司法省内訓

十七年五月

十日

請訓ノ趣第一條  
ハ甲裁判所檢察  
官ヨリ直ニ乙裁  
判所ヲ開ク可キ  
裁判所ノ檢察官  
ニ送致ス可シ第  
二條原裁判所ニ  
於テ保釋責付ノ  
取消ヲ必要トス  
ルハ之ヲ取消  
スハ勿論ナレモ  
當然取消シタル  
者ト爲スコト得  
ス

●新潟縣伺

ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコト得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スコト得ス

明治十六年  
八月四日

第一條 治罪法

第二百九十六

條(前略)檢  
察官之意見ヲ  
聽キ前キニ定  
メタル科料罰  
金之ニ倍云々  
トアル前之字  
ハ同法第九十  
三條之各項ヲ  
指シタルモノ  
ナルヤ或ハ初  
度呼出シニ應  
セサリシト右  
各項之範圍内  
ヲ以テ云ヒ渡  
シタル金額ヲ  
指シタル儀ナ  
ルヤ

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコト得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコト得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

第二條 治罪法

第二百九十六條ニ據リ二倍之科料金ヲ云

ヒ渡スルハ貳圓以上(壹圓五拾錢ノ二倍ノ如シ)之金額ニナルモ科料ト稱シ得ルハ勿論之儀ナル

右者疑義アリ決兼候間至急何分之御指令相成度此段相伺候也

○司法省指令

十六年八月十五日

第一條 治罪法 第二百九十三

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ  
裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一裁判ヲ公行シタルコト又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルコト及ヒ其事由

條ノ各項ニ記載シタル科料

罰金ノ範圍ノ

二倍ヲ云フ者

ニシテ其範圍

内ヲ以テ先キ

ニ言渡シタル

金額ノ二倍ヲ

云フニアラス

第二條 科料ト

稱スヘシ但シ

刑法第七十二

條第二項ニ依

リ二圓四十錢

以上ニ至ルヲ

得ス

二被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三証人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由

四原被ノ証據物件

五辨論中異議ノ申立アリタルコト後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルコト是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六辨論ノ順序及ヒ被告ハラシテ最終ニ發言セシメタルコト

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辨論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルコトヲ記載ス可シ

辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀  
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セルムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

ル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢証處分ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ証人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ッ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ  
檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ証憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ証人ヲ訊問シ其他証憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ証明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリ

タルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ  
其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ  
第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ拘留狀ヲ

發スルヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル理由ニアラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ審裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判

所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル証人又ハ始審ニ於テ陳述シタル証人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スコトヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス  
一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シテ發シタル呼出狀  
二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事  
件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ証明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ解辦ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スコトヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人



ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スコヲ得  
 一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時  
 二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達セタル時  
 三 被告人裁所執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコヲ知リタルノ証アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルコヲ知リタル三日内ニ故障ヲ爲スコヲ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル証人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スコヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルコヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ  
 本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケサル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ  
 第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル証憑ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ  
 第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁

●秋田始審裁判  
所檢察請訓  
明治十七年  
四月二日  
茲ニ告訴ニ附帶  
シテ私訴ヲ爲シ  
タル被告事件ア  
リ裁判官其公訴  
ヲ裁判シタル後  
私訴ノ裁判ヲ爲  
スニ當リ檢察官  
ニ通報ヲ爲サ、  
ル故同官ノ立會

判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得  
又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得  
第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從  
ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ  
被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル  
者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得  
第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判  
所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得  
一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ  
言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時  
二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時  
三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始  
審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時  
四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載  
アル規則ニ背キタル時  
第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スコ  
トヲ得

ナクシテ私訴ノ  
裁判ヲ言渡シタ  
リ此即チ治罪法  
第三十五條ノ法  
典ニ背キタルヲ  
以テ檢察官ニ於  
テ同法第三百六  
十五條第四項越  
權ノ處置アルヲ  
理由トシ控訴ヲ  
爲シ得ルハ勿論  
ト存候得共同法  
第三百六十五條  
第四項ハ刑ノ言  
渡ニ關シ越權等  
ノ處分アリタル  
場合ニ限リ適用  
スヘキ者ニシテ  
檢察官カ刑事附  
帶ノ私訴裁判言  
渡ニ對シ控訴ス

關聯裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニモ故障  
ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ  
於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ  
第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被  
告人拘留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス  
可シ  
第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三  
百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス  
第三百六十九條 輕罪裁判所檢察官ノ控訴又ハ檢察官ノ附帶ノ控訴ア  
リタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條  
ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ  
第三百七十條 控訴ノ關聯裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ關聯裁判  
及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ  
第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審  
裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得  
第四章 重罪公判  
第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

ル如キハ本項ノ規定スル所ニアラスト云フ反對論者アリ聊カ疑義ニ涉リ乞御内訓候也

○司法省内訓

十七年四月

十七日

請訓ノ趣ハ後段解釋ノ通此旨及内訓候也

●前橋始審裁判所檢事伺

明治十六年

十二月五日

甲裁判所ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ欠席言渡ヲ受ケタル被告人

一豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事官ノ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三豫審ニ於テ集取シタル原被ノ証憑

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シテ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辨護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

其公判前乙地ニ於テ又重罪ヲ犯シ逮捕セラレタル際欠席言渡アリタルヲ知リ該言渡ニ對スル故障ヲ乙裁判所ニ爲シタル内ハ勿論乙裁判所ニ於テ之カ判決ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ對手人ヨリ差出スヘキ答辨書等ノ期限ハ甲裁判所ヨリ故障ニ關スル一件書類ノ送致アリタルヨリ起算スル儀ト相心得可然ヤ此段相伺候也

公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

○司法省指令

十六年十二月廿日

別紙伺ノ趣豫審ノ言渡ハ其騰本ヲ被告ノ住所ニ送達シタル後治罪法第二百四十七條ノ期限ヲ經過スレハ被告人ニ於テ之ヲ知ルト否トヲ問ハス確定スヘキ者ニ付伺面ノ如キ場合ハ實際甚タ少ナカルヘシト雖モ若シ確定前其言渡ニ對シ故障ヲ爲スアテハ十五年本省丙第七號達ニ依リ

第三百七十九條 辨護人差支アル時若クハ被告入ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告入自ラ辨護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辨護人ヲ改選シタル時ハ三日間辨論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辨護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルコトヲ記載ス可シ辨論中辨護人ヲ改選シ及ヒ辨論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辨護人ナクシテ辨論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルコトアリト雖モ辨論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告入ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第三百八十二條 辨護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告入ト接見スルコトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得辨護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨ

乙裁判所ニ於テ後犯ノ罪ト共ニ之ヲ判決スルコトヲ得ルハ見込ノ通此場合ニ於テハ甲裁判所ニ照會シ該書類ノ送致アルヲ俟テ書記ヨリ其書類ト共ニ被告入ノ差出セル趣意書ヲ檢察官ヘ送致スヘキ者ト心得可シ

リ裁判言渡アルマテ被告入ト接見スルコトヲ得ス但被告入現ニ拘留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告入ニ送達ス可シ

被告入ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル証人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ証人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開聽ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニ開聽ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告入ヲ呼出ス可カラズ

第三百八十七條 裁判長辨論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辨論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辨論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル証人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ其呼立ニ應シタル証人ハ扣席ニ退カシテ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後証憑ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出

スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルコト又証人ヲシテ他ノ証人ト對質セシムルコトヲ請求スルヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官

民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其証人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルコトヲ得

裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百九十五條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辨論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付

キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スコトヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辨論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セヌ又ハ其理由ノ齟齬アル時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ判益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルコト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スコヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ拘留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟



書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ  
檢察官ハ其書類ヲ五日內ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコトヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出ス可ト得  
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ  
專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出ス可ト得  
專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報

告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢察長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢察長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルコトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スコトナ

ク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定テ可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス  
大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルコトヲ得

- 一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時
- 二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時
- 三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手ハニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ  
第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又

●京都府伺

明治十六年  
十二月十七日

刑ノ執行停止ノ儀ニ付本年九月廿六日京都始審裁判所檢事請訓ニ對シ御訓前ノ次第モ有之候處右ニテハ當府ノ如キ大審院ト所在地ヲ異ニスル土地ニ在リテハ治罪法第四百三十八條ニアル處ノ三日間ハ右言渡書送達ノ時間中ニ已ニ經過シ被告人ニ送達スルヤ否直ニ刑ノ執行ヲセサルヲ

哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス  
一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確証アリタル時  
二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時  
三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時  
四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時  
五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時  
第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ  
一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

得サルカ如キ場  
合アリテ甚タ不  
穩當ト相考候付  
テハ右御訓前ノ  
旨趣ハ大審院ノ  
言渡ノ原裁判所  
等ニ着シ之レヲ  
被告人ニ送達ア  
リシ翌日ヨリ三  
日間ヲ經テ刑ヲ  
執行スヘキモノ  
ト相心得可然哉  
疑義ヲ生シ候ニ  
付何分ノ御指令  
相成度此段相伺  
候也

○司法省指令  
十六年十二  
月廿八日  
伺ノ趣哀訴ハ大  
審院言渡ノ翌日  
二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長  
三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可  
シ  
四刑ノ言渡ヲ受ケタル者  
五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬  
第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ  
之ヲ爲スコトヲ得  
第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言  
渡書ノ謄本及ヒ證書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可  
シ  
原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差  
出ス可シ  
原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サント  
スル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ  
第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事  
一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ  
第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ擱キ刑事局判事全員會

ヨリ起算スヘキニ付本人ヨリ同院へ代言人ヲ差出シ置クカ又ハ重罪事件ニ係リ同院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノトス

●京都始審裁判所檢事請訓

明治十六年九月廿六日治罪法第四百二十七條ヲ按スルニ哀訴ヲ爲サントスル者ハ大審院ノ書記局ニ其申立ヲ爲スヘキヲ明瞭タリト雖

議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴  
第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人

ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得  
大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得  
第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定テ可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴  
第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ  
第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ  
第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁

田哀訴者タルヤ罰金及ヒ拘留科料ノ刑ニ處セラレタル者ヲ除クノ外多クハ收監シアルヲ以テ大審院所在ノ地ニ住セサル訴訟關係人ハ直ニ該院ノ書記局ニ之ヲ申立ツルコト甚ダ難シトス而メ茨城縣ノ伺ニ對スル明治十五年五月卅一日ノ御指令ニ依レハ在監ヨリ差出シタル哀訴狀ハ司獄官吏ヨリ其書類ヲ大審院書記局ヘ回送スヘキ旨趣

ナルヲ以テ是ノ  
 點ニ照シ聊疑訝  
 ヲ生ス何トナレ  
 ハ哀訴ノ申立書  
 ヲ可獄官吏ヨリ  
 大審院へ送付セ  
 ハ原裁判所ノ檢  
 察官ハ其哀訴ア  
 リシコトヲ覺舉  
 セサルニヨリ法  
 律上執行ヲ停止  
 スヘキ日時即治  
 罪法第四百三十  
 八條ニ定メタル  
 三日間ヲ經過ス  
 レハ刑ヲ執行ス  
 ヘキ指揮書ヲ典  
 獄へ發セサルヘ  
 カラス夫レ之ヲ  
 發付スルモ哀訴  
 アリタル上ハ實

判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ  
 同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得  
 第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢  
 察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得  
 民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ  
 異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲  
 スヲ得ス  
 第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意  
 書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
 書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三  
 日內ニ答辨書ヲ差出スヲ得  
 第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ  
 訴ヲ判決ス可シ  
 第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判  
 所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス  
 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦  
 第一章 裁判執行

際執行ハ停止ス  
 ヘキモノナルニ  
 付既ニ發シタル  
 指揮書ハ事實ニ  
 抵觸スルヲ如何  
 セン且不在監ノ  
 訴訟關係人ニシ  
 テ哀訴ヲ爲サン  
 トセハ遠隔ノ地  
 方ニ住スルモノ  
 ト雖已レ自カ  
 ラ大審院ニ出頭  
 シ其書記局へ哀  
 訴ノ申立ヲ爲ス  
 ヘキ儀ニ之レア  
 ルヘシ然レハ其  
 手續タルヤ頗ル  
 迂遠ニ涉リ實際  
 ニ徵シテハ施行  
 シ難キ場合ナシ  
 ト概言スヘカラ

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之  
 ヲ執行ス可カラズ  
 第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類  
 ヲ司法卿ニ差出ス可シ  
 司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行  
 ヲ爲ス可シ  
 第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之  
 ヲ執行ス可シ  
 第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ  
 受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ  
 罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收  
 ス可シ  
 破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ  
 第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行  
 規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ  
 其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム  
 第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ欠席裁判アリタル時ハ其刑ノ

ス故ニ哀訴ニ關  
スル者ト雖其  
書類ノ遞送ハ渾  
テ原裁判所書記  
局ノ取扱ニ屬セ  
シムル時ハ哀訴  
ノアリタルコトハ  
書記局ヨリ檢察  
官ニ通報スルハ  
難キニアラズ加  
之拘留不拘留人  
ノ區別ナク哀訴  
申立ノ手續ハ同  
一ニ期シ實際ニ  
於テモ其宜キヲ  
得法律ニ矛盾ス  
ル所ナシ因テ哀  
訴ニ關スル書類  
ノ遞送ハ原裁判  
所書記局ノ取扱  
ニ屬スヘキ儀ト

言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス  
可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁  
判所ノ書記之ヲ作ル可シ  
一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地  
二罪名刑名  
三再犯  
四裁判言渡ヲ爲シタル年月日  
五對審裁判又ハ欠席裁判  
第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一  
通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ  
違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ  
第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ  
申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シ  
タル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ  
第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合  
ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メ  
タル裁判所ニ送致ス可シ

相心得可然哉此  
段仰内訓候也  
○司法省内訓  
十六年十月  
九日

請訓ノ趣哀訴ハ  
本人ヨリ代官人  
ヲ差出スカ又ハ  
重罪事件ニ係リ  
大審院ヨリ其代  
官人ヲ撰任セシ  
場合ニ非ザレバ  
之ヲ爲ス可カラ  
ズ但シ治罪法第  
四百三十八條ニ  
依リ大審院ノ言  
渡ハ三日間執行  
ヲ停止スヘキ者  
ナレハ其執行ヲ  
爲シ得ヘキニ至  
リ檢事長ヨリ執

裁判所ニ於テ本犯ナルコトヲ認定スルコト能ハサル時ハ事實參考ノ爲  
メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼  
出スコトヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタ  
ル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡  
ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ  
其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタ  
ル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ  
之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 裁判言渡書ノ謄本
- 二 主刑ノ期滿特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類
- 三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

行ヲ命スヘキニ付原裁判所ノ檢察官ニ於テ哀訴アリシコヲ知ラヌノ執行命令書ヲ發スルカ如キ場合ナカル可シ

●松山始審裁判所檢事伺

明治十八年一月廿七日 本年第二號布告ヲ以テ輕罪ノ控訴ヲ許サレ隨テ同布告第三條第四條ニ規定セラ

四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書  
五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テ亦前數條ノ規則ニ從フ  
第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百

所即チ始審裁判所ニ於テナスヘキ者ナリ然ラサレハ控訴ハ時アリテ原裁判ヲ認可スル場合アルノミナラス彼ノ豫納金ヲ收領スルハ無論原裁判所即チ始審裁判所タラサルヘカラス加之治罪法第四百六拾貳條ハ如何ナル時ト雖モ總テ刑ノ執行ヲナスヘキ場合ヲ定メラレタル者ニシテ汎キ意義ナルニ依リ特リ大審院ニ對スル原裁判所ニ

七十六條ノ規則ニ從フ

●第二章

○第一節 書類送達

十四年九月第四十六號布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

○第二節

管轄裁判所ヨリ囑托アリタル被告ノ人逮捕ノ地

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑托アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○第三節

治罪法第七十三條二項陪席判事ノ件

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

○第四節

准現行犯ノ場合

治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

○第五節

家宅搜索ノ制限

治罪法第三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラ

○第六節

治安判事ニ囑托スルヲ許シタル處分ハ司法警察官ニモ囑托

治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑托スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑托スルコトヲ得

○第七節

司法警察官ノ令狀

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラズ

アラヌシテ始審ノ控訴ニ於ルモ原裁判所即チ始審裁判所ニ於テ執行ヲナスヘキモノナリト乙論者ハ之ニ反シ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ必竟大審院ヘ對スル原裁判所ニシテ控訴裁判所モ亦同院ニ對シテハ即チ原裁判所ナリ何トナレハ控訴裁判ニ對シテ上告ヲナシ大審院ニ於テ棄却又ハ直ニ裁判ノアリシ時ハ控訴裁判所ニ



於テ刑ノ執行ヲ  
ナスヘキハ勿論  
ナレハナリ本來  
刑ノ執行ヲ原裁  
判所ニ於テ爲ス  
ヲ必要ナリトセ  
シ所以ノモノハ  
上告ノ際大審院  
ニ於テ棄却シ又  
ハ直ニ裁判アリ  
シ時同院ニ於テ  
執行ノ煩ヲ取テ  
サルヲ要スレハ  
ナリ如何トナレ  
ハ上告ハ罰金ノ  
刑ヲ除ノ外ハ悉  
ク被告人ヲ其院  
ニ送ラス只辯護  
人ヲ出スニ止マ  
レハナリ之ニ反  
シテ控訴ハ必ス

○第八節

普通治罪法ト陸海軍治罪法ト交渉事件ノ處分  
拾貳號布告  
十八年五月第

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セズ

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルハ常人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ管轄普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普

被告人ヲ其裁判  
所ニ護送シ事實  
ノ覆審ヲナスヘ  
キニ依リ直ニ刑  
ノ執行ヲナスニ  
モ毫モ差問ナキ  
ノミナラス却テ  
被告人ヲ送還ス  
ルノ勞費ナク將  
テ逃走ノ憂ナク  
シテ實際上大ニ  
便利ナリト云ヘ  
シ彼ノ豫納金ノ  
如キハ只之ヲ郵  
送スルノ手數ヲ  
要スルノミ現ニ  
被告人ノ其地ニ  
アリテ執行上更  
ニ支障ナキニモ  
拘ラヌ故ヲ送還  
スル等甚々迂濶

通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シト告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人闖毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

○第九節

告訴及告發

明治十四年一月司  
法省甲第一號布達

是迄吟味願ト稱スル訴ヲ受理致來リシ處右ハ廢止候條自今被害者ヨリ犯罪ヲ訴フルモノハ糾問判事檢事又ハ警察官ニ告訴可致此旨布達候事

○明治十四年三月司法省甲第三號布達

刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省ヘ對シ歎願或ハ再審願ト唱ヘ書面差出候者往々有之候處右ハ固ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指令ニ及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

○第十節 輕罪裁判管轄

明治十五年六月司法省丙第二十一號達

大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京憲兵本部

被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

○第十一節

辯護人ヲ用ヒサル辯論

十五年一月第一號布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辨論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有之候得共其裁判所々屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辨護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

○第十二節

被告人訊問時限

十五年十一月第五十三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

○第十三節

被告人訊問方

十四年十月第五十九號

ナル手續ヲナスカ如キノ比ニアラサルナリ加フルニ控訴裁判所ヨリ被告人ヲ原裁判所即チ始審裁判所ヘ送り還スカ如キハ路程ノ永遠行路ノ嶮難ナル場合ニ在テハ又一層ノ不便ヲ感スル所ナリ依テ控訴ニ係ル裁判ノ執行ハ大審院ノ裁判ト異ニシテ直ニ控訴裁判所ニ於テ執行スヘキモノナリト以上兩論ノ派ル、所ニ有之候處小官ハ全

ク乙論者ノ説ト同一ノ意見ヲ持スルモノニシテ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ即チ大審院ニ對スル原裁判所ニシテ始審ノ控訴ニ於ルカ如キ者ヲ指ス律意ニ非ストス法律ノ見解既ニ此ノ如シ實際上ノ使益モ亦前述ノ如ク然リ旁控訴裁判所ニ於テ直チニ執行スヘキモノト思量致候得共又治罪法第四百六拾貳條ハ實際ノ便否ニ拘

治罪法中豫審判事拘引狀ヲ發シ拘引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○第十四節

書記ノ立會ヲ要セサル訊問

十六年三月第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

○第十五節 違警罪即決例

十八年九月第三十一號布告

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス右奉 勅旨布告候事

違警罪即決例

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時

ハラス所謂原裁判所トハ特リ大審院ニ對スル場合ナルノニナラズ或ハ控訴裁判所ニ對スル場合ヲモ包含スルヤ  
○司法省指令  
十八年二月二十四日  
伺ノ趣控訴ノ裁判言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ執行スル儀ト心得可シ

●群馬縣伺  
明治十六年十二月四日  
茲ニ死刑ヲ執行スヘキ者當時病

ハ直ニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得  
第三條 即決ノ言渡シニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得  
第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ  
第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス  
第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ  
第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡シヲ以テ確定ノモノトス  
第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得  
第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納

病(室扶私或ハ腦膜炎ノ類)ニ罹リ更ニ人事ヲ省ミサルカ如キ受刑者アラン此際直ニ執行ヲ爲スハ却テ刑罰ノ本旨ニ忤ヒ少シク妥當ナラサルヲ覺フ因テ右ノ場合ニ於テハ其執行ヲ停止シ假令痊愈ニ至ラサルモ幾分ノ本復ヲ待チ執行スヘキ儀ト相心得可然哉  
法章上明文無之ニ付相伺候也  
○司法省指令  
十六年十二月廿四日

メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス  
第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ避クルコトヲ得ス  
第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ  
第十二條 留置セタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ  
第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ  
○十四年九月第四十八號布告  
刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事  
○第十六節 違警罪即決表離形書例  
明治十八年十二月司法省丙第十一號達



○司法省内訓  
十六年十月  
四日

別紙請訓ノ趣ハ  
令狀ハ勿論終結  
ノ言渡書ヲモ書  
記ノ連署ヲ要ス  
ヘキ者ト心得可  
シ此段及内訓候  
也

●滋賀縣伺

明治十八年  
十月十五日  
明治十四年第五  
十四號布告但書  
ニ依レハ始審裁  
判所在地ヲ除  
クノ外治安裁判  
所ニ於テ輕罪裁  
判ヲ爲ス際訟廷

明治何年 警視廳 何警察署(又ハ何分署)  
諸規則違犯即決表

諸規則違犯	三件三人		四言渡區分人員		計	附加 收沒
	數	員	罪無	科料		
郵便罰則						
酒造稅則						
烟草稅則						
計						

明治何年 警視廳 何警察署(又ハ何分署)  
別號第一表  
別號二表  
同上

内治罪ノ手續ハ  
便宜取計ラフコ  
ヲ得ル上ハ今般  
第三十一號布告  
違警罪即決處分  
ニ對シ正式ノ裁  
判ヲ請求シ其裁  
判ヲ爲ス際訟廷  
内治罪手續モ亦  
便宜ニ取計ヒ可  
然哉果ソ然ラハ  
裁判官ト協議ノ  
上其事件ノ難易  
ニ依リ檢察官ノ  
公廷ニ立會ハサ  
ルモ敢テ差支無  
之様相考候得共  
違警罪正式裁判  
ニ係ル訟廷内治  
罪手續ニ付テハ  
未タ何等御布告

科	料	人員	金額	拘留	留	人員
一完納				一執行濟		
二假納シテ正式ノ裁判ヲ請求セサルモノ				二、ルニ付留置セシモノ		
三不完納				三、保証金ヲ差出シタル後出廷シテ執行ヲ受ケタルモノ		
四假納セサルニ因リ留置セシモノ				四、保証金ヲ差出シタル後出廷セサルニ因リ保証金ヲ没入シタルモノ		
五幾部ニ納否				四、保証金ヲ差出シタル後出廷セサルニ因リ保証金ヲ没入シタルモノ		
六納否全部ニ納否				四、保証金ヲ差出シタル後出廷セサルニ因リ保証金ヲ没入シタルモノ		
換	刑	人員		没入保金何		
七科料ヲ拘留ニ換ヘシモノ				没入保金何		
計				没入保金何		

第六編○治罪○第一類○治罪法○違警罪即決表雛形

等モ無之ニ付一應此段相伺候  
 ○司法省指令  
 十八年十一月十一日  
 伺ノ趣治罪法ニ從フ可キ儀ト心得ヘシ  
 ●福島縣輕罪裁判所若松支廳檢事ヨリ請訓  
 明治十八年十月六日  
 本年九月廿四日第三十一號ヲ以違警罪即決例公布セラレ候ニ付テハ自今違警罪事件ハ總テ一應即決ノ言渡ヲ受シムル者ノ如ク

本表欄外年號并署名標題等總シテ表式ニ照シ記載スヘシ但表中員數ノ記載方ハ千百十九件ナレハ「一、一一九」ト記シ一萬千三百九十八ナレハ「一、一三九〇」ト記ス可シ  
 第一欄ハ刑法ノ各條項ヲ區別シ又男女ノ員數ヲ區分スルコト表式ニ示シタルカ如シ  
 何縣違警罪トアル以下ハ刑法第四百三十條ニ係ル犯罪ノ各項ヲ區別列載スヘシ  
 第二欄ハ告訴告發其他ノ區分ヲ問ハス即決セシ總件數ヲ記スルモノトス但一事件中ノ被告人ニ男女アル時ハ第一欄男ノ下ニ件數ヲ記シ女ノ下ニハ之ヲ省クヘシ又一人ニシテ數罪ヲ犯シ各其刑ヲ科シタル時ハ刑ノ重キ者ニ就キ其刑等シキ時ハ第一欄罪目記載ノ前後ニ從ヒ前記罪目ノ下ニ件數ヲ記シ他ノ罪目ノ下ニハ之ヲ省キ件數重複セサルヲ要ス  
 第三欄ハ同上ノ總人員ヲ記スルモノトス但一人ニシテ數罪ヲ犯シ各其刑ヲ科シタル時ハ重キモノニ就キ其刑等シキ時ハ第一欄罪目記載ノ前後ニ從ヒ前記罪目ノ下ニ其數ヲ記シ他ノ罪目ノ下ニハ特ニ朱字ヲ以テ其數ヲ記シ總人員ト重複人員トヲ識別スルニ便ナラシム可シ

被相考候果シテ然ラハ本職又ハ違警罪裁判所檢察官ニ於テ告訴告發其他ノ原由ニヨリ認知シタル違警罪事件ハ必ス警察官ヘ送致スヘキ義ト相心得可然哉  
 ○司法省内訓  
 十八年十一月三十日  
 別紙請訓之趣見解之通右及内訓候也  
 ●水戸始審裁判所檢事伺  
 明治十八年十月一日  
 科料勾留ニ處ス

第四欄ハ言渡ノ區分ニ從ヒ其人員ヲ記載スルモノトス但科料金全納セサルヲ以テ拘留ニ換ヘタルモノハ別號表ニ記載スヘキモノナルカ故此ニ混記セサルヲ要ス  
 若シ拘留五日ニ該當スルモノ再犯加重ニ因リ六日以上ニ入り科料一圓未滿ノモノ加重シテ一圓以上ニ入ルノ類ハ左ノ如ク表外ニ附記スヘシ  
 刑法第何條何項ニ係ル拘留何日以上ノ内再犯ニ因リ加重ノ者何人何縣違警罪何々(罪狀ヲ)ニ係ル科料一圓以上ノ内再犯ニ因リ加重ノ者何人  
 第五欄ハ無罪以下科料ニ至ル迄ノ人員ヲ通計スルモノトス即チ第三欄ノ人員ト同一ナルヘシ  
 諸規則違犯即決表書例  
 本表欄外年號並署名標題等總シテ表式ニ照ラシ記載ス可シ但表中員數ノ記載方ハ違警罪即決表ニ同シ  
 第一欄ハ諸規則ノ各目ヲ列載シ又ハ男女ノ員數ヲ區分スルコト表式ニ示シタルカ如シ

可キモノ取扱ヒ  
ノ義ハ明治十四  
年第七十二號同  
年第八十號布告  
及ヒ明治十七年  
第四二一六號內  
訓等ニ資リ明治  
十五年一月一日  
前後御發布法律  
規則ヲ區分シ當  
廳若クハ地方警  
察署分署ニ於テ  
處分シ來リ候處  
本年第卅一號違  
警罪即決例御發  
布正式ノ裁判ハ  
治罪法ニ從ヒ處  
辦相成候就テハ  
科料罪ノ義ハ自  
今總テ同裁判所  
管轄ニ歸シ隨テ

第二欄以下各欄ノ書例ハ總シテ違警罪即決表ニ同シ但本表ハ第一欄  
ニ掲ケタル一ノ罰則ヲ以テ一罪トナスカ故一罰則中ノ各條項ヲ犯  
シ各其刑ヲ科シタル時ハ之ヲ合算シテ表記スルモノトス若シ將來  
表式記載外ノ條件起ル時ハ隨時各欄各項ヲ設ケサルヲ得サルコト  
ル可シ即チ拘留ニ係ル者アル如キハ科料ノ上ニ一項(違警罪即決表ニ  
分)ヲ設ケルノ類是ナリ  
別號表書例  
本表欄外年號并署名標題等總シテ表式ニ照ラシ記載スヘシ但各表  
員數ノ記載方ハ違警罪即決表ト同シク數字ヲ以テ記入シ千位ニ、  
點ヲ附シ金額ノ單位ニハ、點ヲ附シ厘位ニ止マルモノトス  
第一表  
第一項ニハ科料ノ言渡(違警罪即決例第八  
條ニ據ラサルモノ)ヲ受ケタル金額ヲ悉皆收納セ  
シ者ニ就キ其人員及金額ヲ掲ルモノトス但前年ノ言渡ニ係ルモノ  
ト雖モ本年ニ至リ收納セシ者ハ此ニ合ス以下各項モ亦此例ニ依ル  
ヘシ  
第二項ニハ即決例第九條ニ依リ科料金ヲ假納セシメタル後其言渡確  
定シタル人員及金額ヲ掲ルモノトス

右七十二號布告  
第七條ハ自然消  
滅候義ト相心得  
可然哉

○司法省指令

十八年十月  
二十四日  
伺ノ趣明治十五  
年已前頒布ノ法  
律規則中拘留科  
料ノ刑ニ該ルモ  
ノハ仍ホ從前ノ  
通十四年第七十  
二號公布ニ依リ  
輕罪裁判所ノ管  
轄ニ屬スヘキモ  
ノトス  
●長野縣伺  
明治十八年  
十月十日  
第一條 十四年

第三項ニハ言渡シタル科料金ヲ完ク收納シ能ハスシテ拘留ニ換ヘタ  
ル人員及其金額ヲ掲ルモノトス

第四項ニハ科料金ヲ假納セサルニ因リ留置セシ人員及其金額ヲ掲ル  
モノトス

第五項ニハ言渡シタル科料金額中ノ幾部ヲ收メタル人員ト其納否金  
額ヲ區別掲載スルモノトス即チ科料一圓ノ言渡ヲ受ケタル者(姑ク  
人ト看  
做ス)資力少クシテ僅ニ二拾五錢ヲ納メ殘金七十五錢ハ收納スル  
能ハサルヲ以テ拘留ニ換ヘシ時ハ人員ノ欄ニ於テ納否ノ中間ニ一  
ト記シ金額ノ欄ニ於テ納ノ下ニ〇、二五〇ト記シ否ノ下ニ〇、七五  
〇ト記スルノ類ナリ

第六項ニハ納期限內ニ在テ未タ全部ヲ納メス又ハ金額ノ内幾部ヲ納  
メ又ハ納期過去ルモ逃走等ノ事故ニ依リ年末マテ納否未定ニ係ル  
人員及金額ヲ掲ルモノトス例ヘハ一圓ノ言渡ヲ受ケタル者二人ア  
リテ未タ全部ヲ納メサル時ハ全部ノ下人員ノ欄ニ於テ二ト記シ金  
額ノ欄ニ於テ二、〇〇〇ト記シ又五十錢ノ言渡ヲ受ケタル者三人  
ノ内一人ハ四十錢一人ハ三十錢一人ハ二十錢ヲ納メ殘金ノ納否未  
タ決セサルヲ以テ換刑スルニ至ラサル時ハ人員ノ欄ニ於テハ納否

御省丙第十九號達中違警罪  
既決未決事件  
表ハ客月第三十一號違警罪  
即決例公布ニ付キテハ自然消滅ノ義ト心得ヘキヤ

第二條 違警罪  
即決事件ハ客月御省丙第八號達違警罪公判表ヘ如何記載スヘキヤ  
第三條 即決例  
第二條末項ニ據リ處分シタル件送致スヘキ手續ハ便宜取計其ノ費用

ノ中間ニ三ト記シ額金ノ欄ニ於テハ納ノ下〇、九〇〇否ノ下ニ〇、六〇〇ト記スルノ類ナリ

第七項ニハ第三項第五項ノ人員中禁錮ニ換ヘシ者ヲ掲ルモノトス

本表各項各欄ノ記載方ハ表式ニ詳ヲカナルヲ以テ更ニ説明ヲ要セス

右書例ニ從ヒ製表シ尙ホ左ノ通心得ヘシ

一 違警罪諸規則違犯ノ處分ヲ甲ノ警察署(分署モ包含)ヨリ乙ノ警察署

ニ囑託シタル場合ニ於テ其全部(被告人ノ尋問ヨリ言渡ニ至ル迄)ノ囑託ニ係ルモノハ

乙警察署ニ於テ製表シ一部(被告人ノ尋問或ハ言渡書ノ傳達等シクハ科料金ノ囑託ニ係ルモノハ甲警察署ニ於テ製表シ彼此重複セサルヲ要ス)

一 各表ノ用紙ハ美濃又ハ同形ノモノヲ用ヒ進達ノ時左式ニ從テ其目錄ヲ添フヘシ

違警罪各表進達目錄

- 明治何年警視廳何府縣何警察署 何枚
- 一 違警罪即決表 同

一 諸規則違犯即決表 何枚

一 別號第一表 何枚

一 同 第二表 何枚

一 違警罪即決表 何枚

一 諸規則違犯即決表 何枚

一 別號第一表 何枚

一 別號第二表 何枚

右進達候也

年 月 日 司法卿宛

何府縣 長官氏名 印

及呼出狀等ニ關スル費用ノ如キハ被告人ニ負擔セシムヘキヤ

第四條 即決例

第八條以下ノ

處分ヲナシ留

置中正式裁判

ヲ請求シ留置

期限ヲ經過ス

ルモ呼出狀到

達スル迄ハ留

置スヘキヤ

第五條 留置費

用ハ何ノ支辨

ニ屬スヘキヤ

第六條 官吏職

務ヲ行フニ常

リ發覺シタル

違警罪暨ヘハ



第三章 豫審

第一節

豫審ヲ要セサル輕罪

明治十四年十月五十四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除ク外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコヲ得ヘシ此旨布告候事  
但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

第二節

豫審終結ノ言渡ニ對シ故障申立ノ件

明治十八年三月司法省丁第拾號達

豫審終結ノ言渡ニ對シ故障申立ヲアシタル事件ニシテ會議局ニ於テ之ヲ消シ更ニ免訴ノ言渡ヲナシタルモノハ明治十五年丁第五號達豫審處分第五表ノ例ニ照準製表シ故障事件表ト共ニ差出スヘシ  
右相違候事

第三節

輕罪裁判所開廷

十四年二月第七十二號布告

○內務省 司法省 指令  
明治十九年 三月五日  
第一條 客年司

法省丙第九號 達ノ通

第一條 客年司

法省丙第十一號 達ノ通訓製スヘシ

第三條 送達手續ノ儀ハ同ノ

通費用ハ被告 人負擔セシムルノ限ニアラズ

第四條 留置期限ヲ經過シタル時ハ直ニ釋放スヘシ

○京都府伺

(電報)

明治十八年 十月二十日  
違警罪即決處分

本年(十月)第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田 協町高山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ  
但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但書ノ通タルヘシ

第四節

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キタル時處分表

明治十五年十一月司法省丙第三十三號達

治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キタルハ本年當省丁第五號達中檢事處分表離形ニ準シ檢事ノ職務ヲ代理スル警部ニ於テ之ヲ調成シ管轄ノ輕罪裁判所檢事ニ差出シ輕罪裁判所檢事ハ之ヲ取纏メ共ニ差出スヘシ此旨相違候事

第五節

警部檢事ノ代理

十四年十二月第七十一號達

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

ハ他府縣へ囑託  
シ得ヘキヤ  
○司法省指令  
(電報)

十八年十月  
二十六日

本月二十日付電  
報伺之趣ハ見込  
之通

●岩手縣伺  
(電報)

明治十八年  
十月二十日

違警罪再犯加重  
ハ即決ヲナシメ  
ル警察署ノ所轄  
ニ依ルガ又ハ違  
警罪裁判所ノ管  
轄ニ依ルカ  
○司法省指令  
(電報)

○第六節 巡查警部ノ代理

十四年十月司法  
省第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查警部ヲシテ代理ヲ爲  
サシムル儀モ可有之候此旨布達候事

第四章 令狀

○第一節

豫審判事令狀ヲ巡查ニ  
帶行セシムル場合 十五年四月司法  
省丁第廿四號達

左ノ通豫審判事ニ及内訓候條此旨相達候事

輕罪裁判所豫審判事

治罪法第三百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡查ヲシテ令狀ヲ他  
管ニ帶行セシムルハ上告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限り輒ク其處分  
ヲ爲ス可キ者ニアラス又第三百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人  
相書ヲ發シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲スヘキヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪  
ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知ス  
ルヲ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサ  
ルナリ此等ハ兼テ注意アル可キ事ナレト雖ホ誤解無之候爲念此段及  
内訓候也

○第二節

在外國公使館ノ内 十六年三月司法  
國人ニ發スル令狀 省丙第壹號達

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ備ハレタル内國人ニ對シ發スヘキ令  
狀ハ明治七年第百貳十八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシ  
ムヘキハ勿論其唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五十三號公達ノ旨  
モ有之ニ付大審院并裁判所ハ其事柄ヲ明記シ當省へ申出テ指令ノ上  
其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ外務省へ申出右唯諾  
ヲ經ルノ手續ヲ了シ令狀ヲ執行セシム可キ義ト心得ヘシ爲念此旨相  
達候事

但本文令狀執行者ハ專ラ明治七年第百二十八號公達ノ旨趣ニ據リ  
聊不都合ノ取計無之様厚ク注意セシムヘシ

○第三節

既決囚ノ逃走者ニ 十四年十二月司法省  
對スル令狀 丙第二十號達

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ  
令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス他ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可  
心得此旨相達候事

○十五年四月司法省丙第十四號達  
既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年

十八年十月  
二十六日  
本年二十日付達  
警罪再犯加重ノ  
儀ハ後段見込之  
通

内第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ更ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨相達候事

○十七年六月司法省丙第貳號達

已決囚ノ犯罪ニ付キ之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ末刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトヲ問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ致送シ又證人トノ出廷セシメタル已決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第四節

既決囚ノ逃走者ニ對スル 十五年二月司法省丙第六號達  
逮捕狀發付手續

始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタルニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記ス可シ  
但管轄地ノ内外ニ拘ハラヌ急遽ノ際巡查ヲシテ令狀ヲ帶行セシ

ムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第二條 管轄地外ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得囑託ヲ受ケタル檢事ノ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條 司法警察ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル者ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲スヘシ  
(人相書逮捕狀書式略之)

○第五節

送達書呼出狀召喚狀勾 十四年十二月司法省丁第廿八號達  
引狀勾留狀及宣誓書式

治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準スヘシ此旨相達候事

別紙

用紙美濃紙ノ類

輪廓寸法凡 七寸五分 横 五寸四分

( )ヲ施スモノ何裁判所トアル角印

送達書

并割印ハ總テ朱以下同シ

〔一〕送達スヘキ書名 壹册		受取人ノ署名 捺印若シ能ハ サル時ハ其事 由	
〔二〕同 壹通		送達シタル月 日時	
右使丁ヲ以テ〔何府縣下何町 又ハ何國何郡何村何番地何某 ヘ〕送達セシルム者也			
明治 年 月	何裁判 日 所之印	親屬雇人若ク ハ戸長ヘ書類 ヲ渡シタル時 ハ其事由	送達シタル場 所
〔何〕裁判所 書記〔氏名印〕		右致送達候也	
編者云送達書ハ二通ヲ作り割印ヲナシ一通ヲ受取人ヘ渡シ一通 ヲ書記局ヘ還納スルモノトス以下同シ			
使丁 〔氏名印〕			

呼出狀

此呼出狀ハ出頭ノ節  
書記局ニ差出ス可シ

〔住所身分職業〕 〔氏名〕		受取人ノ署名 捺印若シ能ハ サル時ハ其事 由	
右〔云々〕ノ事件ニ付證人トシ テ相尋ル儀有之來ル〔何月日 時〕何所ニ出頭可致者也 但同日時出頭セサルニ於テ ハ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ 發スルコアルヘシ		送達シタル月 日時	
明治 年 月	何裁判 日 所之印	親屬雇人若ク ハ戸長ニ渡シ タル時ハ其事 由	送達シタル場 所
〔何〕裁判所 豫審判事〔氏名印〕 書記〔氏名印〕		右之通取扱候也	
使丁〔氏名印〕			
〔住所身分職業〕 〔氏名〕			
召喚狀			

第六編〇治罪〇第一類〇治罪法〇送達書呼出狀召喚狀勾引狀及宣誓書式

右(云々)ノ事件ニ付訊問ノ筋有之(何月日時)當裁判所ニ出頭可致者也

明治 年 月 日  
何裁判所之印

豫審判事(氏名印) 書 記(氏名印)

送達シタル月日時  
送達シタル場所  
親屬雇人若クハ戸長へ書類ヲ渡シタル時ハ其事由

右之通取扱候也

明治 年 月 日

使丁(名氏印)

〔檢事官印〕 勾 引 狀

〔住所身分職業〕 (氏名)

〔若シ氏名分明ナラサ(ルトキハ容貌體格等)右(云々)ノ事件ニ付訊問ノ筋有之裁判所へ拘引ス可キ者也但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索スヘシ

拘引シタル被被告人ノ署名捺印ハサハ其事由  
執行シタル月日時  
執行シタル場所  
執行ノ手續

〔被告人ニ正本ヲ示シ原本ヲ下付ス〕

明治 年 月 日  
何裁判所之印

豫審判事(氏名印) 書 記(氏名印)

〔檢事官印〕 拘 留 狀

〔住所身分職業〕 (氏名)

〔若シ氏名分明ナラサ(ルトキハ容貌體格等)右(云々)ノ事件ニ付治罪法第百二十六條ノ規則ニ從ヒ(何所)監倉へ拘留ス可キ者也但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 日  
何裁判所之印

拘留シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサルハ其事由  
執行シタル月日時  
執行シタル場所  
執行ノ手續  
〔被告人ニ正本ヲ示シ原本ヲ下付ス〕  
家宅搜索ヲ爲シタル時ハ其由  
拘留スルヲ能ハサル時ハ其事由  
右之通取扱候也

(何)裁判所  
豫審判事(氏名印)  
書記(氏名印)

明治年月日時  
(巡查又ハ憲兵氏名印)

(檢事官印) 收 監 狀

(住所身分職業)

○未遂犯ニ付減等○未丁年ニ付減  
○自首ニ付減等○再犯ニ付加重 氏名

(若シ氏名分明ナラサ  
ルハ容貌體格等)

右(云々)ノ事件ニ付取調ヲ爲  
シタル處本罪刑法第(何)條ニ

該ル可キ者ト思料ス依テ檢事  
ノ意見ヲ聞キ(何所)監倉ニ收

監ス可キ者也  
但本人潛匿シタル時ハ家宅

ヲ搜索ス可シ  
明治年月日 何裁判  
所之印

(何)裁判所  
豫審判事(氏名印)  
書記(氏名印)

收監シタル被告人 ノ署名捺印若シ能 ハサル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所	執行ノ手續 (被告人ニ正本ヲ 示シ贖本ヲ下付 ス)	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 事由	收監スルヲ能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也 明治年月日時 (巡查又ハ憲兵氏名印)
----------------------------------	--------------	-------------	------------------------------------	------------------------	------------------------	----------------------------------

宣誓書

(何々ノ)事件ニ付愛憎異懼ノ心ナク總テ

正實ニ陳述ス可キヲ誓フ

明治年月日  
通事(氏名印)  
鑑定人

○第六節

民事訴訟ニ關  
スル告訴

十一年十月司法  
省丙第九號達

民事審理中及ヒ裁判宣告後該事件ニ付刑事ノ告訴ヲ爲シタル場合民  
事ノ審理ヲ中止シ又ハ罪証明白ナルハ裁判執行ヲ停止スヘキノ求  
メヲ爲スヘシ此旨相達候事  
但シ本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ一切取消候儀ト心得ヘシ

●第五章 議員

○第一節

府縣會議員  
犯罪拘引法

明治十二年四月内  
務省乙第十八號達

府縣會議員犯罪ノ廉有之拘引ヲ要スル其會場内ニアルハ議長ノ

承諾ヲ得タル上拘引可致此旨相達候事

第六章 重罪

○第一節 重罪裁判所ノ區劃

十六年九月第  
三十三號布告

明治十四年<sup>十一月</sup>第七十八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始  
審裁判所内管ヲ以テ一區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名  
稱ス

但シ沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ従前ノ通

○第二節 重罪裁判所長

十六年一月  
第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以  
テ其裁判所長ト爲スヲ得  
但シ沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ従前ノ通りタルヘシ

○第三節 陪席判事補充判事

十四年十月第  
五十五號布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分  
其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

○第四節

始審裁判所ニ於テ重罪裁  
判所ヲ開ク時事實ノ探討 十八年三月司法  
省丁第十三號達

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時手續等ニ付本年一月第七十  
二號ヲ以テ内訓ニ及置候處其重罪事件ニ係ル事實ノ探討若クハ此ニ  
關スル景况ノ通報等ハ右始審裁判所檢事ヲシテ其取調ヲ爲サシムル  
モ總テ是迄ノ通治罪法第七十六條并明治十四年當省丁第三十四號達  
ニ據リ控訴裁判所檢事長ニ於テ之ヲ調成シ差出スヘキ事ト心得ヘシ  
爲念此旨相達候事

○第五節 換輕禁錮ノ命令

十五年十月司法省  
丁第五十三號達

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙  
甲號ノ通伺出候ニ付乙號之通及指令候條爲心得此旨相達候事

甲號 罰金ヲ禁錮ニ換フル義ニ付伺

重罪裁判ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者期限内ニ納完セサル時ハ刑  
法第二十七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所閉廳後ハ(始  
審裁判所ニ於テ開キタル時)右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求メニ  
因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候條致度右ハ差掛リ候

事件有之候間至急御指令相成度此段相伺候也

明治十五年九月十八日

神奈川重罪裁判所

司法卿大木喬任殿

判事 荒木博臣 印

乙號

伺之通

明治十五年九月廿六日

●第七章 輕罪

○第一節 輕罪控訴規則

十八年二月 第二號布告

明治十四年<sup>十一月</sup>第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ内施行セズ

第一條 控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖<sup>但</sup>總テ本按ノ裁判言渡シアリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ズ

第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ

●岐阜縣伺

明治十八年 六月廿三日

輕罪ニ係ル控訴ノ儀ニ付本年第

二號ヲ以テ公布

相成候ニ付テハ

控訴裁判所管轄

區域内各地方ヨ

リ控訴ヲナシタ

ル被告人ニ係ル

拘禁中諸費支出

ノ儀ハ本年御省

甲第十三號ヲ以

テ御達相成候處

右押送途中費用

ノ儀ハ沿道府縣

ノ警察費ヲ以テ

支辯シ可然哉此

段相伺候也

○内務省指令

十八年七月 十日

警面伺ノ通

●富山縣伺

明治十八年

更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ズ

第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

○第一節 輕罪ニ係ル控訴事

輕罪ニ係ル控訴事

十八年二月司法省丁第八號達

自今輕罪ニ係ル控訴事件ニ付テハ明治十四年十二月當省丁第三十四號達<sup>(第五號表)</sup>ニ據リ既未決事件表ヲ調成差出スヘキ儀ト心得ヘシ但輕罪裁判所ニ於テ受ケタル控訴事件モ同様ニ該表ヲ調成シ他ノ事件表ト共ニ二箇月毎ニ取纏メ差出スヘシ此旨相達候事

○第二節

減輕ニヨリ輕罪判

十五年九月司法省各表ニ據リ難キ件 丁第四十五號達

重罪ト雖モ法律ノ減輕ニ因リ輕罪以下ニ刑スヘキ者ハ輕罪裁判所ノ



十月三十日  
 輕罪ニ係ル控訴者已決後ハ現ニ拘禁スル地方ノ監獄ヨリ最初裁判言渡アリタル地方ノ監獄ヘ引戻シ服役セシムルモ差支無之候哉

明治十  
 八月二  
 月司法  
 省丁第  
 五號達  
 ヲ以テ  
 消ル

明治十  
 八月二  
 月司法  
 省丁第  
 五號達  
 ヲ以テ  
 消ル

○內務省指令  
 十八年十一月九日  
 同ノ趣該控訴裁  
 判所所在ノ監獄  
 ニ拘禁ノ上服役  
 セシムル儀ト可  
 心得事  
 ●愛知縣伺  
 明治十八年  
 八月三日

管轄ニ屬スル儀ニ候處右ハ輕罪公判各表ニ據リ難キ場合アルヲ以テ此類ニ限リ重罪公判各表ノ例ニ準シ編成シ輕罪各表ト共ニ差出ス儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第四節  
 高等法院ヲ開カ  
 サル所ノ裁判  
 十六年十二月第  
 四十九號布告

治罪法第八拾三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

○第五節  
 輕罪控訴登記簿及書例  
 明治十八年二月  
 司法省第五號達

本年第二號布告ニ依リ各廳ニ於テ審判シタル輕罪控訴事件左ノ登記簿式并書例ニ準シ調製シ二箇月毎ニ可差出此旨相達候事

原 名	「何」輕罪「何」裁判所	「何」控訴「何」裁判所
罪 名	甲 「ハ」毆打創傷シテ二十日以上 疾病ニ罹ラシム 乙 「委」託ヲ受ケタル物件ヲ毀損ス 「又」詐欺取財ノ物件ナルコトヲ知 テ之ヲ受ク	「甲」重禁錮二年 「何」々ニヨリ何等減 「乙」重禁錮三ヶ月
被告 人	男 某名 女 某名 「何」某	「何」某
言	「明治十八年二月一日」對審又ハ 「甲」重禁錮二年 「何」々ニヨリ何等減 「乙」重禁錮三ヶ月	「何」某

發給官帖ヲ  
 收稱シ宣告  
 文ノ相添其  
 都度速ニ當  
 省ヘ差出ス  
 可シ

七年大  
 藏省六  
 十三號  
 達ヲ以  
 テ廢ス

同年中  
 派出檢  
 事廢ニ  
 依テ消  
 ル

○第一類  
 治罪法  
 輕罪控訴  
 登記簿及  
 書例

控訴 事項	「明治十八年二月五日」 「何」某	控訴 人	「甲」被告人 「乙」檢察官	控訴 ノ由	「甲」刑ノ言渡 「乙」刑ニ因ル
控訴 罪名	「甲」原裁判ニ同シ 「乙」ハ詐欺取財ノ物件 ナルコトヲ知テ之ヲ受 ク	言	「甲」無罪 「乙」重禁錮五ヶ月 「或ハ」 「原裁判ヲ認可ス」	裁判 日數	「六日」
判 名	「又」詐欺取財ノ物件ナ ルコトヲ知テ之ヲ受 ク	渡	「乙」罰金拾圓 「監視六ヶ月」	裁判 費用	被告人ニ 科セシ金 官ニテ給 當セシ金 證人其他ニ 給與セシ金
掛 判 事 氏 名	輕罪控訴登記簿書例	掛 判 事 氏 名	氏名	表 記 掛 書 記 氏 名	氏名

此簿札ニ記載ス可キ各條ハ刑事裁判統計材料ニ供スル者トス故ニ言渡アル毎ニ必ス簿式ニ準シ登録シ其機ヲ失スルナキヲ要ス

ス直ニ往復  
スルヲ許ス  
前刑ノ殘期及ヒ  
後刑トモ執行ス  
ヘキ儀ト心得可  
然乎  
明治八年九  
月廿四日司  
法省達番外  
各上等裁判  
官轄府縣へ  
巡廻判事派  
出ノ節申出  
方書式ヲ定  
ム  
明治八年九  
月廿四日司  
法省番外  
檢事派出ノ  
節申出方書  
式ヲ改ム

今簿札中特ニ注意ス可キ條件ヲ左ニ示ス  
第一條 簿式中甲乙ノ符號ヲ付シタルハ假リニ控訴事件ノ二例ヲ示シ登録者ニ參觀ノ便ヲ與フルニ過キス簿式中乙ヲ附シタルハ朱書ナリ  
第二條 原裁判罪名ノ欄内甲ノ符號ヲ付シタル罪名ハ單一ノ犯罪ニ係リ乙ノ符號ヲ付シタル罪名ハ數罪俱發ノ一例ヲ示シタルモノニテ其委託云々ハ現ニ處斷セシ罪名又以下ハ俱發ニ係ル罪名トス故ニ俱發ノ罪名ハ處斷ノ罪名ヨリ二字闕字ス可シ控訴裁判ニ係ル罪名ノ欄モ亦同シ  
第三條 同上言渡欄内ニハ公訴ト私訴トニ拘ハラヌ又公訴ハ主刑附加刑トモ言渡シタル條項ヲ總テ列記スルモノトス其刑期金額ハ加等減輕シテ現ニ科シタルモノヲ舉ク可シ  
第四條 控訴事項控訴申立人ノ欄内ニハ檢察官被告人民事擔當人民事原告人ト一々區別シ一筆ニ訴訟關係人ト概記ス可ラス若シ一ノ控訴アリタル時對手人ヨリモ亦同時ニ控訴セシハ双方ノ名稱ヲ列記シ附帶ノ控訴アリタルモ亦其名稱ヲ掲ケ肩書ニ附帶ト記ス可シ  
第五條 同上控訴ノ理由欄内ニハ本案ノ裁判言渡ト公判ノ手續ニ關

然乎  
○内務省指令  
十八年九月  
十日  
第一項 第三項  
共ニ伺ノ通  
第二項 第一項  
指令ニテ了解  
スヘシ

スル判決トニ拘ハラヌ控訴スル所ノ理由ヲ舉ルモノトス故ニ一人ニシテ本案ノ言渡ト公判ノ手續トニ對シ控訴セシトキハ其條項ヲ列記ス可シ其要旨ハ左ノ類トス  
一 管轄違ノ申立ヲ棄却セラレタルニ因リ  
一 辨論中公判ノ手續ニ付異議ノ申立ニ對スル判決不當ナルニ因リ  
一 要償ニ付テノ言渡不當ナルニ因リ  
一 管轄違ノ言渡アリタルニ因リ  
一 越權ノ處分アリタルニ因リ  
一 無効ノ記載アル規則ニ背キタルニ因リ  
一 違警罪ノ言渡ヲナスト雖其事件ハ輕罪ナルニ因リ  
右ノ例ニ準シ控訴申立ニ係ル事實ヲ簡明ニ記ス可シ若シ前條ニ示シタル如ク雙方同時ニ控訴シ或ハ附帶ノ控訴アリタルモハ其條項ニ控訴人ノ名稱ヲ肩書シ附帶ニ係ルモハ其名稱ノ下ニ附帶ノ二字ヲ註記ス可シ  
第六條 控訴裁判言渡ノ欄内モ亦原裁判ノ言渡ト同シク記載スルモノトス其言渡區別中簿式ニ記載セサリシ二三ノ例ヲ左ニ示ス

- 一 管轄違ナルヲ以テ云々
- 一 辨論中異議ノ申立ニ對スル判決ハ云々
- 一 原裁判ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタルヲ以其効ナキ者トス
- 一 原裁判ヲ認可ス

但何々ノ言渡ハ越權ノ處分ニ係ルヲ以テ云々

- 一 不受理(控訴期限經過)
- 一 消滅(被告人死去)

右ノ例ニ準シ言渡及ヒ一件歸結ノ要旨ヲ漏ラサス記ス可シ

第七條 同ト出廷セシ證人等ノ人員欄内ニハ證人鑑定人ニ限ラズ醫師通辯人事實參考ノ爲メ呼出シタル者ニ至ル迄總テ舉ルモノトス且ツ裁判費用欄内證人其他ニ給與セシ金員ハ其出所被告人ニ科セシト官ニテ擔當セシトニ拘ハラス總テ給與ス可キ金員ヲ舉ク可シ若シ其欄内ニ記ス可キ金員ナキ時ハ固ヲ付シテ脱漏ナラサルコトヲ表ス可シ

第八條 此簿札ハ公判ノ順序ニ從ヒ各件ノ被告人一人ニ付登錄ス可シ若シ一事件中被告人數名アラハ初筆ノ被告人ノ簿札ニ番號ヲ附シ其他ノ簿札ニハ番號ヲ附セス控訴事項受理年月ノ傍ラニ前何號

同伴ト記載ス可シ

第九條 前條ノ場合ニ於テハ第七條ニ示シタル証人鑑定人等ノ人員裁判費用トモ被告總人員ニ關係セシトハ初筆ノ被告人ノ簿札ニ登記シ其他ノ簿札ニハ記スルニ及ハス若シ各自異ルルハ各關係スル所ノ人員金額ノミヲ其簿札ニ登記シ重複セサルヲ要ス

右ノ外番號附記ノ手續簿札ノ用紙年末未決ノ件數人員調書差出方其他ハ明治十六年丁第二十八號及ヒ同年丁第四十號達ニ依ル可シ

○第六節

重輕罪登記簿徵集簡條書補正

明治十八年八月司  
法省丁第拾七號達

明治十五年當省丁第三十壹號統計材料重輕罪公判登記簿並同年丁第六十號及明治十六年丁第二拾八號官報第九十六號登記簿徵集簡條書中增補修正シ同材料別號表第貳第三ヲ改正シ明治十五年丁第五號及本年丁第拾壹號官報第五十七號同材料檢事處分表例ノ說明ヲ增補シ其登錄表記ノ調成及期限等ハ別紙ノ條項并表式ノ趣旨順序ニ據ルヘシ此旨相達候事

○司法省丁第十七號達別紙

重輕罪登記簿徵集簡條書補正  
刑事裁判統計材料取調ニ係ル注意

凡ソ統計材料ハ調査ノ周到ヲ要スル勿論ニシテ其調査ノ周到ナルヘキハ登記ノ正確ナルニ在リ登記ノ正確ナルヘキハ事實ノ明瞭ナルニ在リ事實ノ明瞭ナルヘキハ先ツ其淵源ヲ搜索スヘキ訟廷上尋問等ノ効用ニ歸セサルヲ得サル者アラン姑ク新法實施以來刑事統計年報ニ就テ其一班ヲ舉レハ明治十六年對審裁判中年齡ノ不明ナル者(重罪ニ係ル被告人一〇輕罪ニ係ル被告人二四九)二百五十九人十五年ニハ三百七十三人(重罪ニ係ル被告人二四九)八百零六人十五年二百零九人(輕罪ニ係ル被告人一〇輕罪ニ係ル被告人二四九)又十六年重罪ニ於テ生國ノ詳カナラサル者六十五人十五年三十八人十六年住地ノ不明ナル者二十七人十五年四百〇三人十六年既未婚ノ不明ナル者百三十五人十五年四百六十八人十六年職業ノ不明ナル者二百二十八人十五年百八十四人十六年農業ノ内自他ノ耕地不明ナル者七百二十八人十五年四百十八人(生國以下此ニ至ルマア皆重罪)此兩年間多少ノ異同無キニアラスト雖モ然モ調査周子カラスト謂ハサルヲ得ス豈尋問等ノ効ニ歸セサランヤ抑年齡職業等治罪法中明文アル者ハ言ヲ待タズ其他總テ連年刑事統計中之材料タリ其内調査完全セスト雖モ而シテ明治十四年ニ至リ不明之員數消滅セントスル

ノ勢アリ然ルニ今日反テ尙ホ此ノ如シ務メテ整頓ヲ圖ラスハ將來益甚シキニ至ラン當省統計材料之義ニ就テハ既ニ再三達前之趣モ有之如ク實ニ全國裁判表紀上ノ體裁ニ關係スルヲ鮮少ナラサレハ最モ鄭重ニ取調ヘ粗畧ニ失スルヲ勿レ今復刑事統計材料調書ノ補正ヲ加フルニ方リ此ニ注意ノ要領ヲ附ス

明治十五年當省丁第六十號重輕罪公判登記簿徵集簡條書同十六年丁第廿八號(官報第 九六號)同簡條書追加各條中左ノ如ク増補及改正ス但此達書到達ノ日ヨリ次ノ各條ニ據リ登記スヘキ者トス

登記簿書例ハ明治十五年以來再三本省ノ達前アレトモ往々各廳一定セサル者アリ又補正ヲ要スヘキ者アリ左ノ各條ノ如キ注意ヲ要ス但以下數簡條ハ簿册全體ノ調成方法トス尙ホ明治十五年丁第三十一號重輕罪登記簿札書例並丁第六十號登記簿徵集簡條書及十六年丁第二十八號簡條書第一條各項參看

一 登記簿札(重罪以 下同)總欄ノ大サハ本省印刷ノ寸方ニシテ之ヲ美濃紙(若 下同種)半截中ニ設クル事

但重罪簿札總欄内各欄ハ丁第廿八號明治十 六年ニ明用アル簿式ニ準シテ區畫シ輕罪等ノ簿札總欄内各欄ハ丁第三十一號明治十 五年輕罪簿式ニ準シ各欄ヲ適宜ニ分割スヘシ

一 登記ノ時ハ總テ墨書スル事 明治十六年丁第二十八號中筋式ニ二印ハ朱書トアラハ登録ノ書例區別セシノミニテ必ズ朱書ヲ要セラス

但各欄ニ登錄スヘキ事由ニシテ通例ト爲シ難キ異狀アル者ハ朱書スヘシ假令ハ犯罪及前科又ハ言渡等ノ各欄ニ於テ各條數多ヲ列載スヘキ時其區分ヲ要シ其他通常ト殊異ニシテ辨明ヲ附スルノ類

一統計材料ハ一ケ年間每曆年度一月ヨリ十二月マテツ、取調フル者ナレハ登記簿モ亦既決言渡濟若スルニ從ヒ之ヲ登錄シ重罪ハ三ヶ月輕罪等ハ二ヶ月ツ、每曆年ニ區畫シ得ル様ニ調成假令ハ重罪裁判所ニ在テハ其開應ノ期限ニ拘ラス一ケ年ヲ限リ調製ス年ノ言渡ニ係ル件ノミヲ一括シテ調成シ乙年ニ涉ル者ハ乙年ノ簿冊ニ編入ス明治十五年丁第三十一號登記簿簡條書第二條並十六年丁第二十八號徵集簡條書第一條第五項ノ如キ皆此旨趣ナレシテ其年度ノ錯雜又ハ登錄ノ時機ヲ遷延セサル書丁第二十八號徵集簡條書第一條第一項參看

一重罪裁判所ノ取扱ニ係ル内單ニ輕罪ノ者アレハ其重罪應ノ別冊ト爲シ又輕罪裁判所ノ取扱ニ係ル内重罪ニシテ法律上減輕ニ因リ之ヲ管轄シタル者ハ其輕罪應ノ別冊ト輕罪ト其實性質ヲナスノ例ナレトモ往々本冊ト別冊ト配分ノ混雜セシ者アル如シ自今其區分ヲ判然セシムル事諸規則違犯及違警罪モ亦別冊ト爲ス者ト

一此他輕罪應ノ取扱ニ係ル該新法ニ在テ重罪ノ性質舊時ニ受付ケ又ハ犯故ニ新舊比照スレハ重禁編等ノ刑期ニ該タル者ハ皆別冊中ニ編入スル事如キモ其性質タル全ク重罪タルヘキノ類但前條ノ旨趣ヲ正確ナラシメ且各簿人員ノ調査ニ便利ナラシムル爲メ各簿表面件數人員明治十六年丁第四十號參看ノ傍ラニ其年度最終ノ言渡

ニ係ル簿札ノ番號ヲ附記スヘシ其例左ノ如シ

内何號ハ重罪輕罪又ハ諸罰公判簿札ノ最終

簿札各欄書説明

左ニ掲クル各條ハ重罪又ハ輕罪簿札各欄中各應勉メテ書例ノ整理ヲ與スル者トス但此ニ掲外ノ條項ハ總テ明治十五年丁第三十一號表式及書例ヲ參照シ且十五年丁第六十號及十六年丁第二十八號登記簿徵集簡條書ニ準スヘシ

犯罪ノ欄 此書例明治十五年五月第三十一號重罪公判第一表第一欄書班ノ例ヲ左ニ列ス

一刑法第二百八十六條及二百八十七條ノ如キモ亦裁判官ニ係ル者ハ裁判官トノミ記シ檢事ハ檢事トノミ警察官ハ警察官ト區別スル

一刑法第三編第一章第節各條ノ如キ謀殺毒殺故殺又ハ慘刻ノ所爲又ハ重罪ヲ罪ヲ犯シテ其罪ヲ免ル、爲又輕罪ヲ云々詐稱誘導シテ危害ニ陷レタル謀殺ト故殺又ハ誤殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シ故殺ヲ行ヒ云々ノ類尤モ分明ナルヘキ

一同第二節各條ノ如キモ亦兩目兩耳兩肢舌又ハ陰陽〇一目一耳一肢其他條項ノ事實條分總折シテ記スルノ類成ルヘク分明ナルヘキ

一謀殺毒殺若クハ放火又ハ毆打創傷ノ如キ從犯ハ之ヲ區別シ正犯ト分ツコ未遂犯モ亦同シ

但罪名ノ傍ラニ從又ハ未遂ト記附スルヲ左ノ如シ

何年何月日

刑法第二百九十二條

像メ謀テ人ヲ殺ス從(又ハ未遂)

一 數罪俱發ニ係ル者ノ如キハ其處斷ニ係ル犯罪ノ年月日ニ依テ記スル者トス

但繼續犯罪ノ如キハ其最終ノ年月日ニ依ル

受理ノ欄丁第廿八號簡條  
書第三條各項

一 關席裁判ヲ取ケタル者故障申立テ公判ニ附セシ時ハ此欄ニ其事由ヲ記スル左ノ如シ

何年何月日  
關席裁判ノ故障ニヨリ 此肩書ノ年月日ハ故障ノ申立ヲ受理セシ時ノ年月日ニ依ル

一 裁判時間ハ重輕罪裁判所ニ於テ公訴豫審時間ハ  
算入セスヲ受ケタル日ヨリ起

算シ言渡ノ當日マテヲ通算ス但三十日ヲ一月トシ一年ハ曆ニ因ル言渡ノ欄丁第二十八號簡條  
書第五條各項參看

一 謀殺毒殺放火ノ如キハ名表明治十五年丁第三十一號名表式及本省編纂ニ  
係リ刑事統計名表減輕死罪犯者又因由等ニ關係スルコト多ケレハ某未遂犯罪ニ於テモ亦注意シ左ノ例ニ準ス

何年何月日

言重懲役何年何刑ヨリ未遂ニテニ  
等減又ハ有罪一等減

若シ從犯ナル時ハ前條ニ準シ注解ヲ附シ現刑言ト區別記載シ犯罪ノ欄罪名ノ傍ニ從(又ハ未遂)ト記スルノ注意ヲ要ス

又前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算セシ類ハ其通算ノ刑期ヲ掲ケ前ノ刑期ヲ限記ス假令ハ一罪前ニ發シ既ニ重禁錮三ヶ月ト十日ノ言渡アリ餘罪後ニ發シ前發ノ刑ヨリ重クシテ一年八ヶ月二十日トナル者トセハ左ノ如シ

何年何月日

言重禁錮二年前ノ三月十日ト通算

控訴ノ欄

一 輕罪簿札言渡ト上訴ノ欄トノ間ニ控訴ノ一欄ヲ設ケ現言渡ニ對シ控訴アリタル時其年月日ヲ記シ次ノ上訴ト區分スルコト

犯時年齡

一 刑法第一編第四章第一節第七十九條ニ係ル以下各條ニ係ル者ノ如キ尤モ判然タルヲ要ス假令ハ二十年ニ滿チタル者ハ滿二十年ト記シ若シ此ニ過ル者ハ二十年一ヶ月又ハ二ヶ月ト記シ二十年ニ滿チタルハ十九年何ヶ月ト記スルノ類凡二十年以上若クハ以下各齡總







ニ之ヲ記シ科料ノ條ニハ之ヲ省クヲ左ノ如シ

罰金	人員	金額
罰金科料併科	科料	
一、〇二五	一、八二五、〇〇〇	
一、〇二五	三、八八、二五〇	

第三欄ニハ罰金若クハ科料ノ言渡ヲ受ケタル金額ヲ悉皆收納セシ者ニ就テ其人員及金額ヲ掲クヘシ

第四欄ニハ言渡金額中ノ一部若クハ數部ヲ收納セシ人員ト其納否ノ金額ヲ區別記載スル者トス即チ罰金拾圓ノ言渡ニ係ル者若シ資力少クシテ僅ニ貳圓ノミヲ納メ殘金八圓ハ禁錮ニ換ヒラレシ時ハ本欄人員ノ項ニ一ト見做シト書シ項ニ二、〇〇〇否ノ項ニ八、〇〇〇ト記スルノ類ナリ

第五欄ニハ罰金若クハ科料言渡ノ金額ヲ悉皆收納シ能ハサル無資力ノ者ニシテ換刑ノ處分ヲ受ケシ人員及其金額ヲ掲載スヘシ

第六欄ニハ納期猶豫限内ニ在テ未タ全部ヲ收メズ又ハ數部ヲ收メ又ハ納期ヲ過ルモ逃走等ノ事故ニ依リ年末マテ未定ノ者ヲ掲クヘシ即チ本欄未定ノ全部ニ於テハ既ニ言渡ハ確定スト雖モ未タ全ク納否ノ決セサル人員ト金額ヲ記シ一幾部ニ於テハ若シ既ニ幾部ヲ收メシモ逃走等ノ事アルカ故ニ其未納ノ分ヲ以テ換刑ノ處分ヲ爲ス

ニ至ラサル如キ未定ノ人員ト其納否ノ金額ヲ記ス然レ此幾部中ニハ第四欄ノ員數第四欄金額不納ノ分ハ換刑トナヲ混合ス可ラス但此欄納否ノ書例ハ第五欄人員及其金額納否ノ區分記載ノ例ニ據ルヘシ

第七欄ニ換刑ノ處分ヲ受ケタル者即チ第四欄及五欄ノ人員ニ就テ換刑ノ刑名及期限ノ區分ニ從ヒ其人員ノミヲ掲載スヘシ

此他前年ヨリ繼續シ來ル者及本年ノ言渡ニ係ル者ノ内期滿免除又ハ死亡等ニテ消滅セシ者アル時ハ只欄外ニ其人員金額ノミヲ附記スヘシ

附帶私訴表改正

明治十五年丁第三一十號中附帶私訴表ノ第一欄物品土地山林建築物及船舶金錢等ノ類及ヒ罪名ノ類聚記載方ハ本年分ヨリ改メテ本省刑事統計年報第六部附帶私訴表明治十五年第八十九表ノ例ニ據リ調成スヘシ但書前同十六年第八十一表

檢事處分表書例増補

明治十八年當省丁第十一號官報第五一七號改定檢事處分第一表説明并明治十五年丁第五號同第二表欄外執行ノ條説明左ノ如ク増補ス本年分ヨリ此ニ據リ調成スヘシ

一 告訴及告發ノ區分ニ注意ヲ要ス假令ハ被害者ヨリ警察官ニ告訴シ

警察官之ヲ檢事ニ送致セシ時モ亦其事實タル告訴ニ係ル故ニ之ヲ告訴ノ欄ニ於ル内外國人ノ各項ニ從テ配分登錄スルノ類ナリ

一他廳ヨリ全部ノ囑託アリシ如キモ亦他廳ニテ受付ケタル事實其初メ内國入ヨリ告訴セシカ又ハ告訴セシカニ就キ告訴又ハ告發ノ區別中ニ配分スルノ類ナリ但間ノ計算ハ託屬ヲ受ケタル日ヨリ起算ス次條ノ場合モ亦此ニ準ス

一治安裁判所ノ件數中豫審ヲ要スル事件ニシテ之ヲ其管轄始審裁判所へ送附セシ場合ニ於テハ本(支)廳表中ニ之ヲ掲載シ治安廳ノ表ニハ之省キ欄外ニ附記スヘシ此外前年又ハ本件内豫審ヲ要スル爲メ本廳へ送附何件ト略記スルノ類

但シ本件ハ本廳ニ於テ受付即チ到着ケタル日ヨリ時間ヲ計算ス

一各輕罪裁判所ニテ開設アリタル重罪裁判所ノ言渡ニ係ル各刑ノ執行人員ハ別紙ニ調成シ肩書ニ何重罪裁判所言渡ニ係ル執行人員ト附記シテ輕罪廷ノ言渡ニ係ル者ト區別スヘシ明治十五年丁第五號第一表欄外執行各條

但シ重罪廷ノ取扱ニ係ル者ハ禁錮以下罰金科料ニ至ルマテ總テ重罪廷ノ内ニ合シ輕罪廷ニ係ル者ト混ス可ラス

一裁判費用沒收物品徵收及處分ノ件モ亦重罪廷ニ係ル者アル時ハ之ヲ區別スヘシ

### 第八章 集治監

#### ○第一節 空知集治監囚人犯罪

十五年八月第 四十一號布告

空知集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

#### ○第二節 樺戶集治監囚人犯罪

十五年三月第 十六號布告

樺戶集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

#### ○第三節 沖繩縣重罪犯

十五年七月第 三拾三號布告

明治十四年(十二月)第七十八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ證據擬律按ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

#### ○第四節

樺戶空知集治監囚人重罪犯

十六年十一月第 三拾八號布告

八年五月十四日  
職制章  
程改定  
ニ依テ  
消ル

職制改  
革ニ依  
テ消ル

明治七年二月十四日  
法省達番外  
是迄罪囚口  
供按ニ掛リ  
檢事ノ名上  
連班ト認來  
ル處以後連  
班ノ二字ヲ  
刪除ス

十年九月廿七日  
九號布  
告ニ依  
テ消ル

明治八年七月廿七日  
法省達十九  
號  
府縣裁判所  
ニテ死罪ハ  
被告人ヲ勾  
留シ巡回判  
事ヲ待ツニ  
付テハ他日  
口供反異等  
ノ見込アル  
者ハ下調假  
口供へ捺印  
爲致置苦シ  
カラス

樺戸空知兩集治監ノ囚人假出獄免幽  
内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三拾號布告準シ處分スヘシ

○第五節 集治監囚人訊問 十五年十二月司法省丙第三拾四號達

樺戸及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノコトアレハ本年第十六號同第四拾一號公布ノ趣モ有之ニ付該監司獄官へ囑托スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○第六節 札幌根室裁判所治罪手續 十五年六月第

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證據擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ  
○十四年十二月第七十九號布告  
各裁判所ノ位置及ヒ管轄區畫之義本年(十月)第五十三號ヲ以テ布告候處北海道(函館始審裁判所管内ヲ除ク)并ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ  
但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ管

轄ニ屬ス

○第七節 罰金禁錮及監視 明治十七年七月内務省乙第三十四號達

罰金ヲ輕禁錮ニ換ヘタル場合ニ於テ其日數十日以下ナル時ハ拘留ノ例ニ依リ警察署附屬ノ留置場ニ於テ執行スルヲ得ル儀ト心得可シ此旨相達候事

○明治十七年三月内務省乙第十九號(警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ)達監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルハ必ス監視票ヲ攜帶セシメ其滞留數日ニ涉ル者ハ滞留地ノ警察署ニ到リ謹慎ヲ表シ官吏ノ認印ヲ受ケシム可シ此旨相達候事  
但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄内ニ捺印スヘシ

○明治十七年七月内務省乙第卅二號(警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ)達刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其事實ヲ具シ直ニ上申致來候處自今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

●第九章

○第一節

無能力者法律上ノ  
代人民事擔當人  
治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

十四年十二月第  
七十三號布告

無能力者

一未丁年者

二妻タル者

三白痴瘋癲人

四治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一未定年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一未定年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四雇主(但其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時)

○第二節 海上路程ノ猶豫

十五年二月  
第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

●第十章 巡查使用

○第一節 巡查及兵員要求使用手續

十四年九月第  
八十二號達

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證物件差押其

他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ

巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分

營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得

○第二節 所在巡查使用

十四年十二月司法  
省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物判差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條像テ可達置此旨相達候事

●第十一章 訴廷

○第一節 書記局訟庭等掌務心得 十四年十月司法省丁第十八號達

書記局其他訟廷等ノ心得書別紙ノ通相達候事

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書

第一條 書記局諸般ノ事務ハ豫メ其主掌ヲ定メ或ハ之ヲ定メサル等實際ノ便宜ニ從フ(十五年十月同省丁第五十五號達改正)

第二條 訟廷ノ取締被告人扣所ノ看守ハ巡查獄卒等ヲシテ之ヲ掌ラシムヘシ

第三條 訴訟口詰ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訴訟人呼入其他訟廷ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條 門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置クトキハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシム

但東京各裁判所ハ此限ニ在ラス

第五條 宿直ハ等外吏員雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番(退廳後ヲ云フ)ハ判任官ニテ順次之ヲ務メシムヘシ

但東京裁判所ハ此限ニ非ラス

○第二節 公廷ノ取締 十四年十月第八十六號達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スルメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシ公庭ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

●第十二章 傍聽証人

○第一節 裁判傍聽 十五年三月司法省丁第二十號達

裁判傍聽ノ義ハ官民ヲ擇ハス渾テ傍聽席ヘ相廻シ可申此旨相達候事但外國人ニシテ公然ノ照會ヲ經タル者ハ此限ニ在ラス

○第二節 司法警察官ノ證人 十五年三月司法省丙第十號達

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トス

斷獄則 明治三年五月廿五日刑部省定 獄廷規則ヲ定ム

●千葉縣伺

明治十八年九月四日

一郡吏員戶長等職務上ニ係リ刑事裁判ノ証

人トノ裁判所ニ出頭スルトキハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルヲ得ルハ勿論ノ義ト存候得共被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ明治十七年六月太政官第五十七號公達ニ準シ請求セサル義ト心得可然哉又ハ右ノ場合ト雖郡吏員戸長等ニ在テハ請求スルヲ得ヘキ儀ニ候哉

ル件ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ

○第三節 諸官吏ノ證人 十五年六月司法省丙第二十二號達

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷ヘ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル義ト心得可シ此旨相達候事但巡查及等外吏ノ着席ハ此限リニアラス(但書十五年十月同省丙第三十一號達改正)

▲參着 諸官吏証人云々但書十五年六月司法省丙第二十二號巡查及等外吏ハ此限ニアラス

○十七年六月第五十七號達

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖郡被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セザル儀ト心得可シ

○第四節 全旅費日當請求 十七年六月第五十七號布達

一前顯太政官第五十七號公達ニハ被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ請求セサル義ト有之候得共治罪法第九十九條ニハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得ト有之然レハ被告事件未タ判決ヲ經サル以前ニ在テ之レヲ請求シ置キ無罪又ハ免訴トナリタルトキハ之ヲ受取サル義

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖郡被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セザル儀ト心得可シ但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ

右相達候事

○明治十五年三月司法省丙第十號(大審院裁判所警視廳(府縣(東京府ヲ除ク)達)治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トスル件ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相達候事

明治十五年十月司法省丙第三十二號(大審院裁判所警視廳(府縣(東京府ヲ除ク)東京警兵本部)達)總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付キ證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スル時ハ本年當省丙第十號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事

但シ巡查及ヒ等外吏ノ着席ハ此限リニアラス

●第十三章 印章

○第一節 判事檢事書記印章 十四年十一月司法省丁第二十一號達

第六編○治罪○第一類○治罪法○旅費日當○判事檢事書記印章 三百六十七



五分寸尺曲方

某	始	審
裁	判	所
某	支	廳

始審裁判所支廳  
各一額ヲ彫刻ス  
輕罪裁判所支廳

字体ハ篆書ヲ用ヒ認メ易キヲ要ス且文字ノ數ニ據リ或ハ「之印」等ノ文字ヲ刻スルモ妨ケナシ

○十四年十二月司法省丁第二十七號達

本年第五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスルヲ附記スヘシ左ニ雛形相添ヘ此旨相達候事

書式雛形

於八王子治安裁判所

印章雛形

橫濱輕罪裁判所

橫	濱	輕	罪
裁	判	所	

○十六年一月司法省丁第二號達

支廳管内ニ在ル治安裁判所(支廳所在地ヲ除ク)ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クトキ用ユヘキ印章ハ明治十四年當省丁第廿七號達ノ例ニ據リ治安裁判所ニ於テ所轄支廳ノ印章ヲ調製シ押用スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

但彫刻ノ上ハ印鑑ヲ以テ届出ヘシ

○第三節 犯人證人ノ拇印

十六年五月司法  
省丙第十六號達

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

●第十四章 犯罪

○第一節

勅奏任官華族帶  
勳有位者犯罪

十五年三月司法  
省丙第十一號達

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

別紙

司法省



勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルコトヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

○十六年五月司法省丙第二號達

勅奏官華族并ニ有位帶勳者犯罪取扱方ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第十一號達ト可心得事

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十二日附ヲ以テ御達有之候處其罰金ニ處スヘキモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處スヘキ儀モ有之候條右本人ヲ出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スヘキ時

ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也

明治十六年三月三十一日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ通

但十五年三月二十二日附其省ヘ達中帶勳有位者トアルハ勳六等以上從六位以上ヲ指シタル儀ト可相心得事

明治十六年五月八日

○第二節 帶勳者身分取扱

十五年十一月司法省丁第五十六號達

内國ノ勳章ヲ賜リタル外國人並外國ノ勳章ヲ佩ヒタル内國人身分取扱ノ儀ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

内國勳章ヲ賜リタル外國人並外國ノ勳章ヲ佩ヒタル内國人身分取扱ノ儀伺

内國ノ勳章ヲ賜リタル外國人ハ内國ノ帶勳者ト取扱ヲ同スヘキハ固ヨリ言フ筈タス亦内國人ニシテ外國ノ勳章ヲ帶ル者ニ於テモ勳章

ハ外國ノ勳章ナレトモ其佩用ヲ許奪スル等ハ我政府ノ處置ニ係ルノ  
ミナラス其外國ノ勳章ヲ受ケタル者ハ該勳章ニ相當スルノ榮譽ヲ有  
スレハ之ニ相當スルノ取扱ヲ爲スヘキ者ト存候得共右ハ身分取扱上  
ニ關係スルコトニシテ別ニ可據法例ナキヲ以テ相伺候條果シテ其取扱  
ヲ內國帶勳者ト等クヌ可キ義ニ候ハ、外國ノ何々勳章ハ內國ノ何々  
勳章ニ相當スル者ナルヤ此段合テ至急何分ノ御指令有之度候也

明治十五年五月廿六日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺之起 第一項 伺ノ通 第二項 外國ノ勳章ヲ受タル內國人ハ  
其受佩ヲ許否スルニ止ルモノニシテ身上特別ノ取扱ヲ要セサル義  
ト心得ヘレ

○第三節 帶勳者公權剝奪 十五年三月司法  
及停止ノ届出 省丙第九號達

帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルハ其罪狀  
並刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省へ可届出此旨相達候事  
但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章並年金票共収奪ノ上當省へ差出スヘク

候事

○第四節 恩給ヲ有スル者公十 八年一月司法  
剝奪及停止ノ届出省 丁第壹號達

自今官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪  
若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ  
刑ニ處シタル時ハ直ニ其宣告文寫書ヲ添當省へ可届出此旨相達候事

○第五節 陸軍扶助料海軍退隱料 十八年五月司法  
ヲ受クル犯罪届出方 省丁第十三號達

官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若ク  
ハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ  
處シタル時其届出方ノ儀本年丁第一號ヲ以テ相達置候處明治八年太  
政官第四十八號達陸軍武官傷痍扶助及死亡者祭祀家族扶助概則並ニ  
同年太政官第四百四十八號達海軍退隱令ニ據扶助料又ハ退隱料ヲ受ク  
ル者モ右達ニ準シ當省へ可届出此旨相達候事

○第六節 民事裁判言渡ヲ犯 十四年十二月司法  
人ノ本籍へ通知 省丁第三十三號達

民事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍へ通知シ及ヒ犯人前科取調ノ儀是迄區々

相成居候處來明治十五年一月ヨリ左ノ通可相心得此旨相達候事  
刑事裁判言渡アリタル所ハ治罪法第四百六十四條ニ掲クル既決犯罪  
表ノ寫ヲ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ右送致ヲ受ク  
ル檢事ハ其旨ヲ犯人本籍ノ地戸長ニ通知シ該表ハイロハ標號ニ區別  
編纂致シ置ク可シ

犯罪人前科取調ヲ要スル所ハ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ照會  
シ檢事ハ編纂致シ置タル既決罪表寫ヲ送致ス可シ

○第七節

恩給並扶助料ヲ有スル者 十五年三月司法  
公權剝奪及停止ノ通知 省丁第十五號達

明治八年第四百四十八號公達海軍退隱令並ニ明治九年第九十九號公達  
陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒  
罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ並ニ恩給ヲ有スル軍人ニ  
シテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アル  
所ハ其都度直ニ大藏省ヘ通知可致此旨相達候事  
但新法實施已後は迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハ、其旨直ニ  
大藏省ヘ通知可致事

○第八節

醫師醫業ニ關ス 十五年八月司法省  
ル犯罪ノ通知 丁第四十二號達

改定律 明治元年十  
例百十 二月廿四日  
四條ニ 布告産婆賣  
依テ消 藥又ハ墮胎  
ル ノ取扱ヲ禁  
ス

十五年八月第三十九號公布ニ依リ今般内務卿ヨリ照會ノ都合モ有之  
候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之致處斷候節ハ其都  
度該宣告文謄本相添内務省ヘ通知候様可致此旨相達候事  
▲參 看

○十五年八月第三十九號布告

醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會  
ノ審議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトヲ得  
但其事開業免許ヲ得ルノ前ニ在リト雖本項ニ準シテ處分スルコ  
トアルヘシ

●第十五章

○第一節 被告人責付手續

十四年九月第  
四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告  
候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ  
應シ出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ  
第二條 責附中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知

第六編○治罪○第一類○治罪法○被告人責付手續

ヲ爲スヘシ  
第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責附ヲ取消スヘシ

○第二節 保釋責付取締心得

十六年十一月司  
法省丙第八號達

保釋責附中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ附左ノ通各裁判所へ相達候條此旨爲心得相達候事  
丁第三十一號

保釋責附ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付保釋責附ヲ爲ス際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届置ク可キコトハ言ヲ俟タズ其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス  
若シ已ムヲ得サル事由アルハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖居住所外ニ於テ一泊以上滞在スルハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルハ其住所ノ地ノ戸長ニ届置ク可シ

第三條 代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其實附ヲ受ケタル者モ亦同シ

○第三節

商船内犯罪取扱規則制定

明治十四年十二月達  
太政官第六十五號

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證據及事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ前項ノ場合